

平成14年度  
外部評価結果報告

平成15年12月  
鹿児島工業高等専門学校

# ま え が き

## 1. はじめに

昭和 38 年 4 月 1 日に開校した鹿児島高専は、平成 15 年 4 月に創立四十周年を迎えました。開校時は機械工学科 2 学級、電気工学科 1 学級で始まり、昭和 42 年に土木工学科、昭和 61 年に情報工学科が設置され、平成 3 年に機械工学科 2 学級のうち 1 学級が電子制御工学科に改組され、それ以来、5 学科・入学定員 200 名、総定員数 1,000 名の体制となりました。

最近の状況としては平成 12 年度に、待望の「専攻科」(機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻、土木工学専攻の 3 専攻：入学定員 20 名)と「地域共同テクノセンター」が設置されました。この両者の設置が最も早かったという点において、鹿児島高専は九州地区で最も先端をいく高専へと成長・発展しております。

一方、時を同じくして平成 12 年度の全国高専ロボコン大会において、本校は初めて九州地区代表になり、国技館で開催された全国大会に出場することができました。さらに平成 14 年度には、2 回目の九州地区代表を勝ち取り、国技館での全国大会「アイデア対決全国高専ロボコン 2002」において、幸運にも初めての入賞(「技術賞」)の栄冠を得ました。

## 2. 高専教育の意義と発展(国専協の取り組み)

高等専門学校は創設以来「即戦力を持つ中堅技術者」の育成に取り組み、戦後の教育改革で、わが国が生んだ最も成功した教育機関の一つとして高い評価を受けてきました。21 世紀を迎え、技術者に求められる資質も次第に高度化し、「複合領域への対応能力を持ちながら、得意な専門分野に関する高度の基礎的素養をもつエンジニア」が求められるようになりました。

折しも、平成 16 年度から、国立高専は、独立行政法人国立高等専門学校機構という法人になる予定であります。法人化により、国立高等専門学校が高等教育機関であることが一層明確になり、教育システムの機能が一層拡充されることを期待しています。将来構想としては、たとえば、大学が学問を創造する人材(ニュートン型の人材)の養成を目指すのに対して、国立高等専門学校は、「人類の福祉のために」という使命を自覚した実践的技術者(エジソン型の人材)の育成を目指すものとして、大学とは異なる高等教育機関の柱を確立する方向に進んでおります。

このような長期ビジョンを踏まえて、国立高等専門学校協会は国立高専法人化を契機に、高等専門学校のさらなる(1)個性化、(2)活性化、(3)高度化に取り組んでいます。具体的に、(1)地域のニーズに応じた学科の再編・重点化、公務員制度の枠組みを離れた人事システムの構築等による個性化、(2)教学組織と事務組織の連携強化と質の向上、教育・研究業績に対する評価手法を導入等による更なる活性化、(3)教育研究の質の向上のための重点的な資源配分の徹底化、専攻科の拡充と質の向上、地域のニーズに根ざした共同研究の積極的推進等による高度化を目指しております。

### 3. 鹿児島高専卒業生の活躍

本校では昭和 38 年に開校して以来、有能な学生が入学し、素晴らしい教育が行われた結果として、本校の卒業生は、社会において大活躍をしております。昨今、不景気、不景気と騒がれ、高校・大学を卒業しても就職が難しいという社会情勢のなかで、高専、とくに鹿児島高専にあっては、企業からの求人倍率は依然として高く、公務員至上主義の学生以外は、就職率 100%を維持しております。このことは、取りも直さず、本校卒業生の社会からの評価が高いことの実証であります。

本校卒業生の社会における大活躍振りの一つの指標として、本校卒業生の企業のオーナー率が極めて高いことがあげられます。例として、本校の機械工学科と電気工学科の第 1 回（昭和 43 年卒）から 15 回（昭和 57 年卒）までの卒業生のうちで、企業の創業者・継承者、自営業を含めて企業の大小を問わず会社のオーナーになっている卒業生数を調べてみました。第一回卒業生 104 名に対してオーナーは 13 名、率にしてなんと 12.5%です。第 2 回から第 4 回卒業生のオーナー数はそれぞれ 16, 12, 12 名で、それ以降の卒業生のオーナー数は漸減してはいますが、上記 2 学科の 15 年間の卒業生総数 1,421 名のうち、117 名の卒業生（率にして 8.2%）がオーナーとして活躍しています。ちなみに、鹿児島大学工学部の機械系学科と電気系学科の卒業生で、本校と同じ年令の卒業生、即ち昭和 45 年から昭和 59 年までの 15 年間の全卒業生 2,029 名について調査すると、オーナーになっている卒業生は 48 名（率にして 2.4%）でありました。本校の卒業生のオーナー率は大学卒に比べて 3 倍以上も大きいことがわかります。

他高専、他大学卒業生のオーナー率の比較については、タイミングよく次の調査研究が発表されました。「わが国の技術者養成システムにおいて工業高等専門学校が果たす役割と意義」（北海道大学大学院教育研究科、安宅仁人氏修士論文：平成 15 年 3 月）という論文に、北海道地区を含む 11 校の高専と、二つの大学（北海道大学、室蘭工業大学）について、卒業生の会社オーナー率（自営率）の調査結果が掲載されています。そのデータによると、本校での調査対象（機械工学科と電気工学科、昭和 43 年 3 月～昭和 57 年 3 月卒業生）と同じ専門、ほぼ同じ卒業年度範囲内の卒業生のオーナー率は、最も高い高専で 4.3%、北海道大学工学部で 0.8%、室蘭工業大学で 1.4%であります。この結果から、鹿児島大学卒業生のオーナー率（2.4%）は、大学としては大きいことがわかりますし、鹿児島高専の卒業生のオーナー率（8.2%）は、これら大学に比べてはるかに高く、また調査対象の高専中でも最も高いものであることがわかります。

これら客観的データから、先述のように本校卒業生が如何に優秀で、起業化スピリッツが旺盛であったかがわかります。このことはまた、これまでの本校の教育方針、教育方法、教職員の資質も素晴らしかったことを示すものであります。

### 4. 鹿児島高専のこれからの取り組み

本校は、平成 15 年度に JABEE（Japan Accreditation Board for Engineering Education：日本技術者教育認定機構）認定審査を受けるために大変な準備に取り組んでおります。ISO-9000 や、ISO-14000 が、商品等の品質管理や環境管理に関する管理システムが認定の対象になっているのに対して、JABEE は、世界に通用する技術者を養成する高等教育機関としての教育システムが対

象になるばかりではなく、その教育システムの成果が問われる認定制度であります。今年本校が JABEE 認定審査にパスしますと、平成 16 年 3 月に専攻科を修了する卒業生から、「技術士補」の資格を有することになり、卒業後、4 年間の実務経験を積むと「技術士」試験を受験する資格ができます。22 歳で卒業し、4 年間の実務経験後、「技術士」試験を受けてパスすると、最短 26 歳で「技術士」を取得することができます。

日本に JABEE 制度ができましたのは、1999 年であり 2003 年 4 月現在で、九州沖縄地区で JABEE 認定校となったのは、熊本大学の機械、電気、土木と、福岡大学化学工学科の合計 4 分野だけです。高専は一校もありません（全国では今春、3 高専が認定され、今年度本校を含めて 4~5 高専が受審予定）。もし、本校が今年度の審査にパスしますと、九州地区高専ではナンバーワンになりますし、本校専攻科修了生は鹿児島大学、九州大学など、多くの大学の学部卒業生より、資格が上ということになります。高専の法人化も、鹿児島高専にとっては一大飛躍のチャンスと捉えて、教職員一体となって取り組んでおります。

鹿児島高専は、これまでも、今も、元気いっぱいです。鹿児島高専は、もはや大学工学部を陵駕する時代に入りました。これまで、及び現在の本校生、教職員の健闘を大いに讃えたいと思います。

最後になりましたが、有識者の方々、井上卓己様、門久義様、赤坂裕様、深井晃様、迫一徳様、相良正典様、吉原不二枝様には、大変貴重なご意見を賜り感謝しております。

今回いただいたご意見・提言に対して現状分析を行い、今後の対応について慎重審議を行いましたのでご報告します。これからも引き続き本校の教育活動等の改善を図っていく所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 15 年 12 月

鹿児島工業高等専門学校長

前 田 滋

# 目 次

まえがき

1．有識者との懇談会委員名簿	1
2．有識者との懇談会日程表	2
3．有識者懇談会議事録	3
4．有識者からの提言に対する本校の今後の対応等	3 3

平成14年度鹿児島工業高等専門学校と  
有識者との懇談会委員名簿

役 職 名	氏 名
鹿児島県教育委員会学校教育課長	井 上 卓 己
鹿児島大学工学部教授	門 久 義
鹿児島大学地域共同研究センター長	赤 坂 裕
(株)評価システム調査研究所 代表取締役 (株)鹿児島TLO 代表取締役	深 井 晃
(財)かごしま産業支援センター専務理事	迫 一 徳
(株)相良製作所代表取締役	相 良 正 典
鹿児島県近代化遺産調査委員	吉 原 不 二 枝
鹿児島工業高等専門学校校長	前 田 滋
教務主事	森 隆
学生主事	内 谷 保
寮務主事	中 島 正 弘
研究主事(兼 専攻科長)	平 田 登 基 男
一般教育科文系科長	松 本 裕 司
一般教育科理系科長	大 竹 孝 明
機械工学科長(代理)	持 原 稔
電気工学科長	須 田 隆 夫
電子制御工学科長	児 島 毅
情報工学科長	山 本 浩
土木工学科長	岡 林 巧
図書館長	古 賀 亜 彦
情報教育システムセンター長	榎 園 茂
地域共同テクノセンター長(代理)	西 留 清
J A B E E 委員会委員長	池 田 英 幸
F D 委員会委員長	佐 々 木 正 司
事務部長	田 中 誠 一
庶務課長	西 山 尚 宏
会計課長	小 西 竹 生
学生課長	為 石 勝 美

## 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会

1. 日 時 平成15年3月13日(木) 13:30～16:30

2. 場 所 管理棟(2F)大会議室

### 3. 会次第

- 1) 開 会
- 2) 校長あいさつ
- 3) 委員の紹介等
- 4) 概要説明及び各主事説明
- 5) 意見交換
- 6) 閉 会

### \*資 料

- 有識者からの評価・提言の達成状況 資料1
- 鹿児島工業高等専門学校の目的, 理念等の相関(案) 資料2
- 鹿児島高専のJ A B E Eへの取り組み 資料3
- 国立高等専門学校の法人化について(最終報告) 資料4
- 学寮チュートリアル 資料5
- 文部科学時報(本校掲載) 資料6
- 本校の過去2年間の記事等 資料7
- 自己点検・報告書 第3号 資料8

## 有識者懇談会議事録

### 開 会

【庶務課長】 ただいまから、平成14年度鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会を開催いたしたいと思っております。

初めに、お手元に配付した資料の確認からさせていただきます。

初めに、レジュメとしてあります「鹿児島高等専門学校と有識者との懇談会」、スケジュールが書いてあると思います。それに本日の出席者の名簿、それから有識者との懇談会の委員の名簿が次のページに書いてあります。本日は、この中で鹿児島県学校教育課長の井上様が県議会等でご欠席ということになっております。そのほかに本校の代理出席として、機械工学科長の三角教授が所用で今日欠席しております、持原教授が代理として出席しております。それから地域共同テクノセンター長の河野教授が所用による欠席で、代理として西留教授が出席しております。

「座席表」はご覧のとおりでございます。一部変更がありますけれども、後でご紹介したいと思います。

資料1として「有識者からの評価・提言の達成状況及び今後の課題」という資料があります。資料2として「鹿児島高専の目的、理念等の相関(案)」、資料3として「鹿児島高専のJABEEへの取り組み」、資料4として「国立高等専門学校の法人化について」、資料5として「鹿児島高専学寮チュートリアル」、資料6として「文部科学時報」の12月号、資料7として「本校の過去2年間の記事等」、それと資料番号を打ってありませんけれども、「大学と学生」の平成13年7月号、それともう一つ、ただいまカラーでお配りいたしました「鹿児島高専類似3学科の履修可能概要」というものを配付しております。

そのほかに、資料1を説明するために「説明者、評価・提言事項」というふうにした説明者の段取り表があると思いますので、それについてもご確認願いたいと思います。

### 委員 自己紹介

【庶務課長】 それでは、委員の自己紹介等をさせていただきます。

私の方からお一人お一人名前を呼びたいと思っております。

で、起立の上、ご紹介をお願いしたいと思います。

ちょっと順不同になって申しわけないんですけども、初めに鹿児島大学工学部教授の門久義様でございます。

【門 委員】 門でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、鹿児島大学地域共同研究センター長、赤坂裕様でございます。

【赤坂委員】 赤坂です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、評価システム研究所代表取締役、鹿児島TLO代表取締役であります深井晃様でございます。

【深井委員】 よろしく申し上げます。

【庶務課長】 続きまして、財団法人がこしま産業支援センター専務理事の迫一徳様でございます。

【迫 委員】 迫でございます。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 相良製作所代表取締役の相良正典様でございます。

【相良委員】 相良です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、鹿児島県近代化遺産調査委員の吉原不二枝様でございます。

【吉原委員】 吉原です。よろしくお願いいたします。

### 鹿児島高専出席者 自己紹介

【庶務課長】 次に、鹿児島高専の出席者をご案内します。

初めに、前田校長でございます。

【校長】 前田です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、森教務主事です。

【教務主事】 森です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 次に、内谷学生主事です。

【学生主事】 内谷です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 中島寮務主事です。

【寮務主事】 中島です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 平田研究主事です。

【研究主事兼専攻科長】 平田です。よろしくお願いいたします。

【庶務課長】 続きまして、こちらに参りまして、松本一般教育科文系科長でございます。

【一般教育科文系科長】 松本です。どうぞよろしくお願いいたします。

【庶務課長】 大竹一般教育科理系科長でございます。



【一般教育科理系科長】 大竹でございます。よろしく  
お願いいたします。

【庶務課長】 ちょっと順不同で申しわけないんですけ  
れども、機械工学科長の代理であります持原教授でござ  
います。

【機械工学科長代理】 持原でございます。よろしくお  
願いします。

【庶務課長】 須田電気工学科長でございます。

【電気工学科長】 須田です。よろしく願いします。

【庶務課長】 児島電子制御工学科長でございます。

【電子制御工学科長】 児島です。よろしく願いしま  
す。

【庶務課長】 山本情報工学科長でございます。

【情報工学科長】 山本でございます。よろしく願い  
します。

【庶務課長】 岡林土木工学科長でございます。

【土木工学科長】 岡林でございます。よろしく願い  
します。

【庶務課長】 古賀図書館長でございます。

【図書館長】 古賀です。

【庶務課長】 榎園情報教育システムセンター長でござ  
います。

【情報教育システムセンター長】 榎園です。

【庶務課長】 地域共同テクノセンター長代理西留教授  
でございます。

【地域共同テクノセンター長代理】 西留でございます。

【庶務課長】 佐々木FD推進委員会委員長でございま  
す。

【FD推進委員会委員長】 佐々木でございます。

【庶務課長】 池田JABEE委員会委員長は、ただいま  
まちょっと別な案件で出席しておりませんが、後  
ほど参ると思います。

事務部でございますけれども、田中事務部長でござい  
ます。

【事務部長】 田中です。どうぞよろしく願いします。

【庶務課長】 小西会計課長でございます。

【会計課長】 小西です。よろしく願いします。

【庶務課長】 為石学生課長でございます。

【学生課長】 為石です。よろしく願いします。

【庶務課長】 松元技術室長でございます。

【技術室長】 松元でございます。

【庶務課長】 そして、私は司会進行をさせていただきます  
庶務課長の西山でございます。よろしく願いいた  
します。

## 開 会 校 長 あ い さ つ

【庶務課長】 初めに、本校の現状につきまして、校長  
先生から挨拶をお願いしたいと思います。

よろしく願いします。

【校長】 有識者との懇談会委員の皆様方には年度末の  
最も忙しいときに足を運んでいただきましてありが  
とうございます。心からお礼申し上げます。

本校の自己点検・評価につきましては、平成11年9  
月に改正されました高等専門学校設置基準第3条第1項  
に「高等専門学校は、教育水準の向上を図り、当該高等  
専門学校の目的及び社会的使命を達成するため、当該高  
等専門学校における教育研究活動の状況において、みず  
から点検及び評価を行い、その結果を公表するものとす  
る。」とあります。

また、第3項に「点検及び評価の結果について、当該  
高等専門学校の職員以外の者による検証を行うよう努め  
なければならない。」ということで、公表の義務化と、  
それから授業の内容及び方法の改善を図るため組織的な  
取り組みをなささいという趣旨の基準でございますが、  
この設置基準の趣旨によりまして、平成13年、有識者  
との懇談会において、本校の将来及び本校のあり方につ  
いてご提言いただきました。ご提言いただいたことにつ  
きまして取り組みました結果を今日また評価をお願いし  
たいと思います。

実はこの有識者との懇談会は、前校長の深井先生の先  
見の明で平成8年からスタートしておりまして、最初1  
6名の委員の方をお願いしていたんですけれども、前回、  
平成12年度、すなわち13年の今ごろ行われました懇  
談会は7名の委員で、辛口のご意見・ご提言をお願いす  
るということで7名の委員の方から評価をお願いいたし  
ました。

今日は、この懇談会は第6回目ということになります。

今日、お手元の資料1の一番後ろにB4の表がござい  
ます。この左側に「評価・提言事項」とございます。こ

れは前回、7名の委員の方に提言していただいたものが41項目掲げてありますが、実はこの倍以上ございましたんですが、同じような内容のものをまとめさせていただきまして、41項目としております。その41項目をさらに分類いたしまして、「(1)教育目標・将来展望」から「(12)その他」ということでグループ分けさせていただきました。

提言事項の内容を右側に書いてありますが、これにどのように対処するかということで、検討する組織・取組母体というものを考えさせていただきまして、その検討組織と母体の名前を書いております。その右側に目標達成時期、いつまでにこの点については達成しましょうという計画を立てたわけでありまして。

それぞれの項目について後ほど担当の者から説明させていただきますが、私の方から概略としまして、大変たくさん提言事項でありますけれども、その1つ1つが鹿児島高専の学生のため、また学校のためになることばかりでありまして、すべて真剣に取り組む内容であるというふうに感じました。

それで、これをどのように精力的にやるかということで、まず、校長補佐連絡会というものを作りまして、校長と4主事・部課長という少人数で主な計画を立てて、そしてそれぞれの項目を効率よく実行する計画を立てました。

幾つか実例を申し上げますと、FD委員会、これは12年7月から発足はしていたんですけども、13年度から、より活性化しようということで活性化に努めました。

それから、13年6月にJABEE委員会を立ち上げました。

それから、提言とは直接関係はありませんでしたけど、「学生何でも相談室」というのを平成14年2月に設けて、学生の相談に応じることにしました。

それから、特に学校の命題だと、ひとつ強いパワーでやらないかんというようなことで、「特命統括官」という名前で、FD委員長、JABEE委員長を「特命統括官」という名前にいたしました。ロボコン、留学生担当、4つの「特命統括官」を委嘱いたしまして強力に推進しようという心がけていたしました。

具体的なことはまた後ほどありますけれども、その幾

つかとしては、総合学力調査といまして、1年から5年まで学んだことの主だった一般科目の問題、専門科目の問題、一般科目は全学科共通の問題でやるということで、それぞれの学年で勉強したことを、卒業するときにどれだけ実力があるかということを示したいということで、総合学力調査というのを始めました。

それから学生による授業評価、これは数年前からやっていたんですけど、13年度から100%、すべての教科、非常勤の先生も含めて授業評価をいたしました。鹿児島大学から何人が非常勤講師に来ていただきましたけれども、その先生方にもかなり学生からの厳しい評価があり、恐縮なのですが、この結果、毎年少しずつ授業、だんだん授業が分かるようになって、このごろ先生のイメージが変わってきたというような学生からの評価を受けました。

それから昨年、高専生は専門技術には強いんですけども、英語に弱いという一般的な社会的評価があることを知っておりまして、それを何とかしたいということで、昨年、4年生全員にTOEICという、世界的に通用する試験を全員に受けさせることになりました。確かに第1回目は悪かったですけど、これが年2回ほど受験することによって、低学年と高学年で英語の実力が分かるようになったということです。

こういうことで、先ほど申しましたけれども、提言していただいたことは本当に我々が取り組まなくちゃいけない問題ばかりでありまして、2年後、今になってみますと、学校全体でJABEEをやらないかんということ、それから法人化の具体的な提案をせないかん、ということをまず2年前にもう既に予見されておられた内容でありました。

「三国志」の「職司」というところに、「時務を識るは俊傑に在り」という文章があるんですけども、「じむ」というのは、事務職員の事務、事を務めるのではなくて、時を務めると書きますが、「時務とは、その時、その場、その問題に応じて第一に対処しなければならない務め」、そういうことができるのは俊傑であるということなんですけど、まさに2年前に提言いただきましたことは、すべて「時務」を知った方で初めて提言されたものということで、我々はこの提案について本当に真剣にやってきました。

身内のことで恐縮ですけれども、うちの全教官、事務官、本当にそれぞれ皆さんを見習って「時務」を知るべく、やってきたつもりでございます。その結果を今日説明させていただきまして、また新たな指摘をいただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 会 次 第

【庶務課長】 それでは、これから入っていきたくらいなんですけれども、今日の段取りについてご説明したいと思います。

これから資料1に基づきまして、それぞれのご提言に対するの取り組み状況、それから今後の課題、それについて各担当者からそれぞれ説明していただきます。説明者の一覧というのがA4横長であると思うので、それに基づきましてそれぞれ説明していただきまして、今から14時50分まで、約1時間その説明をしていただきまして、その後、休憩を挟みまして、それについて各委員の先生からご質問なり、さらなるご提言をいただきたいと考えております。

それで、14時50分になりましたら休憩を入れまして、その後、15時から質疑応答ということにしたいと思います。

時間がありましたら、ちょっと足元悪いんですけども、新しく専攻科棟ができましたので、専攻科棟を見学ということにさせていただきます。

16時30分には予定どおり終了したいと思いますので、時間の調整よろしくご協力をお願いしたいと思います。

## 森 教 務 主 事 の 説 明

【庶務課長】 それでは、初めに森教務主事の方から、この横長の紙を見ていただきたいんですけども、1番から39番、たくさんあるんですけども、それぞれについて15分ほどで説明をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【教務主事】 教務主事の森でございます。

最初に、16項目あるんですけども、それを15分ということですので駆け足でいきたいと思います。資料をあちこちめくっていただくようになると思います。

れども、最初、14ページをお開きいただきたいと思っております。

## 評 価 及 び 提 言 No. 3 1

「自己点検・評価」のところから本題に入ってまいります。11番目ですね。

教務主事は、教務のことと、それからそれ以外の部分で関連があるのとないのとで2つに分かれておりますので飛び飛びになりますけれども、最初に、シラバスに關しましては、新しいシラバスの様式を作りまして、「本科目の位置付け」という欄を作りまして、前後左右の関連を文章で書くようにいたしました。

来年度からはこのシラバスすべてを電子化しまして、ホームページに載せます。そして変更がある場合にはホームページ上で変更がいつでも見れるというふうに予定しております。

## 評 価 及 び 提 言 No. 3 2

32番の改善点のところですが、私は2年前のこの会に出ておりませんので少し様子が分かりませんが、そこにありますように11年度と12年度の改善、どのくらいできたか説明不足であるという委員の方々のご指摘を受けまして、この反省点として、真摯に受けとめまして、今、校長が申しましたように全委員会・組織を挙げてこの項目のすべてを洗い直しました。文系の方では文系会議を4回ぐらい開いた覚えがあります。教務委員会でもこの関連で2~3回会議を持ってありますが、全学を挙げてそういう組織で検討いたしました。そして2年間を要しまして、大体改善を達成したのではなからうかと思っております。今日の説明でお話ししたいと思っております。

## 評 価 及 び 提 言 No. 3 3

その次のページですが、外部評価に關しましては、お配りしてあります冊子の3年分を昨年、13年度に作りしました。ちょっとまだ今、今日空白になっておりますけれども、これによりますとまた平成16年度に作ることになると思います。

それから、本日の日程につきましては2日間というご指摘もありましたけれども、今日も2人ぐらい出張の方に出ておりますが、なかなかこの時期、全員を揃えることも大変でございまして、今度も1日になってしまいました。

### 評価及び提言 No. 3 7

続けて、その関連で、その次であります、16ページの方には、学位授与機構のことについて掲げていますけれども、専攻科を持っていながら、学士という資格は外部評価ということになります。これもそこに「伝聞」と書いておりますけれども、学位授与機構長は、J A B E Eに通ったところから学位授与の権利を委譲したいという個人的な意見も表現されております。そういうことでも、本校が、来年受審予定のJ A B E Eに通ることがそういう早道であると考えております。

### 評価及び提言 No. 3 9

39番の知名度・PRにつきましては、直接は中学生には「一日体験入学」、あるいはIT教育支援というのを2つの中学校に本校の学生が出て行ってやりましたけれども、そういったときのアンケートで、やはり本校の認知度は、同じ隼人町内でも79%、国分では63%というぐあいに、なかなか高専というのは知られにくい存在だということが分かっております。

しかし、マスコミなどで取り上げられるのが一番早道だということで、良いことで取り上げられるようなことをやりたいというふうに思っております。昨年度は留学生の暴力事件で話題になりましたけれども、それ以降はかなりいいことで新聞に載っていると思います。お手持ちの資料の方に記載してあります。

### 評価及び提言 No. 1

最初の方に返りまして、1ページをお願いいたします。

「長・中期展望・教育理念」というところですけれども、これは先ほど申しましたように全組織を挙げて検討しておりますが、さらにこういうことが昨年から本年度にかけまして、高専の独立法人化ということをにらみまして、いろいろと検討することがありました。中期目標・中期計画を立てるとか、そういったことで長・中期の展望を全教官が何らかの機会に考えるという機会に恵まれているところであります。

今、J A B E Eということがありまして、会議の数とか非常に多くて多忙を極めておりますけれども、この方向で学校全体が心一つにして努力している状況であります。それが中期目標への第一歩を踏み出すことであり、教育理念を少しでも実現していこうと思っております。

す。

### 評価及び提言 No. 2

2番目の特長化につきましても、鹿児島高専が全国の高専の中でも特に比べてどうかということで、少しおこがましいようですけれども、誇れる点は、就職率は相変わらず、公務員は最近ちょっと厳しいですけれども、それを除きますと民間はほぼ100%という状況であります。これは、同じ年齢に近い高校の就職の困難化の状況からみますと、求人率は大体10倍近くありまして、ゼいたくなことだと思っております。

本校では、オフィス・アワーズということをして3年前からやっております、教官全員が学生の来室を待つという取り組みであります。ちなみに、この橋渡しをできやすいように「学生何でも相談室」というのを立ち上げております。

それから、本校には学生寮があるということが1つの特長であります。これについてはまた後ほど担当者から申し上げます。

同じく地域共同テクノセンターも、別な資料にありますように、全国高専の中では活躍が目立っている方じゃないかと思っております。

それから次に、これから立ち上げるのですが、地域共同テクノセンターの「錦江湾テクノパーククラブ」という企業をまとめたようなのと同じように、隼人町と連携しまして、スポーツ関係で生涯教育のスポーツという面で「隼人錦江スポーツクラブ」というものを設立し、15年度から実施へ向けて準備中であります。

それから公開講座、出前講座は積極的に実施しております、数えてみたら、全国高専の中では開設数が2番目に多かったということでもあります。

最後の項目では、高専のロボコン、ロボットコンテストが全国大会に進めた。それから技術賞をもらった。あるいはベンチャービジネスプランコンテストで第1回、第2回、最高賞をもらっていることなどで、ものづくりを基本とした本校の教育の成果が少しは表れているんじゃないかと思っております。特に高専の競争の中で少しは本校が、自慢とは言いませんが、結果が出始めたところじゃないかと思っております。

テクノセンターの件は担当者に譲りまして、次は4ページに移ります。

#### 評価及び提言 No. 4

少子化対策については、今後、小・中学校、特に小学校あたりへも何か手を打つべきだろうと思っております。

#### 評価及び提言 No. 5

(2)に移りまして、「教務活動」

必修・選択のバランス、あるいは学科間の不統一等が指摘されておりますけれども、これは今回はうまく解決できておりません。何回ものカリキュラム編成その他でいろいろなものを抱え込んでバランスが悪くなっているとも思います。2～3年後にカリキュラムの大改訂をやらざるを得ませんので、そのときに検討したいと思っております。

#### 評価及び提言 No. 6

演習・実験については、評価いただいてありがたいと思っております。

#### 評価及び提言 No. 19

次は10ページに飛ばさせていただきます。

「対外活動」の中の小・中学校との連携ですけれども、先ほど申しましたが、13年度に「学生派遣によるIT教育支援」というプロジェクトを組みまして、日当山中学校、国分南中学校へ通常の時間に、3時間目～4時間目とか5時間目～6時間目に、5年生あるいは専攻科生を5人あるいは3人のチームを組みまして、教室の中で講師の役をするあるいはアシスタントの役をするという、いわば教育学部の教育実習みたいなことをやりましたけれども、学生、中学生ともに非常に効果を上げていると思います。その2つの中学校から受験者が増えるという副産物もありました。

そのほかロボット関係のこと、あるいは出前授業等で小・中学校との連携を広げております。

今後も、県の方などからお誘いがあれば、大学・高校・高専・中学校という大きな連携の中に入れていきたいと思っております。

#### 評価及び提言 No. 20

高校との連携は、工業高校を中心に「オープン・キャンパス」などを実施しております。

#### 評価及び提言 No. 25

次にちょっと飛びまして、12ページの「組織・管理運営」に入りますけれども、教官交流の件に関しましては、必要と思っておりますが、大学関係へ転出されてい

る方は数名おられますけれども、実際の交流はできておりません。これは法人化後にそういうシステムができ上がって全国的に盛んになるんじゃないかと期待している項目であります。

#### 評価及び提言 No. 26

私の最後の説明ですが、26番の委員会見直しにつきましては、これも委員会を減らしたというようなことはありませんでした。どちらかというと、新しい項が増えてまして委員会が増えるということになっております。見直しはやりまして、メンバーを変えたりはしております。

忙しい事項につきましては専門委員会を作りまして、会議の数を減らして効率よくということで、入試専門委員会、釜山情報大学との交流専門委員会、それからタイにありますカセサート大学交流準備委員会などで動いております。これは学术交流ができましたのでカセサート大学交流専門委員会へと変えるということを進めております。

それからJABEE委員会を新設しましたし、教官選考規則、教官推薦委員会規則などを作りまして、教官審査、教官推薦に関する委員会、これは常時メンバーが変わりますけれども、そういうシステムを作り上げました。

それから、先ほど校長から紹介がありましたように特命統括官という制度を作って、4人を任命しております。

全体的にはLANを活用しまして、会議の時間の短縮とか情報公開ということでやってはおりますが、委員会の数は増える一方で、時々冗談で委員会を減らす委員会を作ろうというようなことを嘆いているような感じであります。

非常に簡単ですけれども、またご質問で再度お答えしたいと思います。

### 内谷 学生主事の説明

【庶務課長】 引き続きまして、内谷学生主事から学生指導等についてよろしく申し上げます。

【学生主事】 学生主事の内谷です。

学生主事管轄の16と18と22、「学生指導」「就職指導」「ロボコン」について説明したいと思います。

#### 評価及び提言 No. 16

まず、9ページの「学生生活」の中の16番の学生指

導ですが、ご提言のところでは、「新聞を賑わすような大きな問題児がないのは喜ばしいことである。」ということが出ていたんですが、その後、ご存じのように13年度には、留学生が新聞を大きく賑わすようなことになってしまいました。また、学生の単車利用死亡事故とかそういったことも起きて、単車の件については高専とは載らなかったんですけども、新聞に載るような状況が起りまして、「学生心得」の周知徹底を図るということで指導してまいりたいと思います。

それともう一つ、違反を行った学生に対して自覚を持たせ、ちゃんとした責任を取ってもらうということを考えまして、「学生指導及び懲戒処分基準」というものを作成しまして、このような「学生便覧」というのを全学生に配るんですけども、この中にも記載をして周知徹底を図るということにしました。それとまた、保護者懇談会等を通じまして、保護者の方にも処分基準というものを配りまして周知徹底を図っております。

その後、14年度はそれほど大きな事故というのはいまありませんでした。

それともう一方、今度は心のケア、メンタルの面からのケアをということで、「学生何でも相談室」というのを、14年2月から準備に入りまして、4月1日から発足させて、今、学生の相談に応じております。

しかし、「学生心得」に鹿児島高専の学生としての心得を書いているんですが、それを全生徒に対して守らせるということはなかなか難しい現状であるので、今後もそういったことを周知徹底させ、あるいは見直し等、法人化になったりあるいはJABEE等も入ってきますので、検討し、改善すべきところは改善していきたいと思っております。これで学生指導面に対するの説明を終わります。

#### 評価及び提言 No. 18

次に「就職指導」、次の10ページの18番ですけども、ご存じのように現状は非常に就職状況は厳しくなっておりますが、先ほども校長及び教務主事からの報告にもありましたように、何とか高専は、就職希望者に対してはほぼ100%就職内定をいただいております。ただ、土木に関係するところは大きいにあるんですが、公務員を希望する学生に対してはなかなか100%というわけにはいかない状態が起っております。公務員も採る

人数を絞ってきておるようですし、それに反して希望者の方は増えているというような状況で、公務員に関しては若干決まらない状況ですが、会社希望については100%という状況です。

それと、資質の向上に関しましても、JABEEあるいは先ほど教務主事から申しましたような出口試験、こういったものを通じて資質の向上の実現を図っていききたいと思っております。

しかし、今後は、求人といっても、学校の方に直接来て求人をしてくれるということがだんだん減ってきて、ホームページというようなものを通じての求人が多くなってきますので、そういった面の対応というものを考えていかなければいけないんじゃないかと思っております。これで就職指導についての説明は終わります。

#### 評価及び提言 No. 22

続きまして、「対外活動」のところ、12ページの22番、ロボコンについてでございますが、これも先ほどご説明ありましたように、14年度は九州大会で技術賞ということで、さらに全国大会にも参加させていただきまして、ここでも技術賞という素晴らしい賞を受賞することができました。これも先ほどありましたようにロボコン等の支援の会というのが、後援会、同窓会を中心に発足しまして、支援による成果が上がったものと思っております。

さらに、ロボコンの主体は、メカトロニクス研究部というクラブが主体になっているんですけども、この保護者の会が発足しつつあるということで、さらにそういう支援も充実していくんじゃないかなと思っております。

目標としましては、右側に書いてあるような目標を掲げております。これが達成できるように今後も努力していきたいと思っております。

簡単ですが、学生主事関係の説明を終わります。

#### 中島寮務主事の説明

【庶務課長】 続きまして、中島寮務主事から、学業不振者ということでよろしく申し上げます。

【寮務主事】 それでは、寮関係についてご説明させていただきます。

この横長の9ページ、寮関係についてご報告いたしま

す前に、少しうちの寮についてご説明を申し上げたいと思います。

本校の学生寮には約550名の寮生がおりまして、全学生の約半分以上がこの寮で寝起きしているということでありまして。収容人員の規模からいきますと、全国1、2ぐらいのいわゆる全国屈指の規模を誇っております。そして1年生の男子は全寮制ということで全員寮に入れておりまして、そして教室では得られないような、いわゆる先輩、後輩と一緒に寝起きすることによって、同じ釜の飯を食うことによって人格形成というような取り組みもしております。

#### 評価及び提言 No. 17

以上のような寮なんですけど、前回、委員の方々から、せっかくの全寮制であるから、この特長を生かして、学業不振者とかそういった教育をしてはどうかというご提言をいただきました。

そこで、寮務委員会というのがありますが、そこで検討いたしました結果、平成13年12月の後期中間試験というところから「学寮チュートリアル」と銘打ってこれを実施いたしました。その詳しい資料は、お手元の資料5というところがありますが、そこに1枚裏表、入れております。

少し説明させていただきますと、本校では年4回定期試験を行っております。その10日ほど前に、試験時間割発表というのがございます。そのときから試験終了まで約2週間ちょっとあるんですけども、そこで、もっと勉強したいとか、分からないところがあるというふうな1年生を寮の多目的ホールというところに集めまして、そして先輩である4年生、5年生、それから専攻科生がおりますので、そういった上級生たちが、専門とか英語とかそういったところの個別指導を行っております。

資料5の裏にもありますように、終わった後にアンケートをとってみました。そうしますと、「成績が14番も上がった。」とか、それから「先輩がパソコンを持ち込んで情報処理を教えてくれた。」といったことが効果として現れております。教室では先生に質問しにくい1年生も、いわゆる顔見知りと一緒に風呂に入ったり、一緒にご飯を食べたりするような先輩には質問もしやすいということで、ちょっとした効果を上げております。以上のようなことになっております。その後もずっと続

けております。

以上で寮関係のご説明を終わります。

## 各科の説明

### 評価及び提言 No. 3・No. 7

【庶務課長】 続きまして、3番の「ベンチャーマインド」という項目につきましては、機械、電気、電子、情報、土木と、それから地域共同テクノセンターということで、いろいろ検討しています。

それと、また、7番の電気と電子、情報の学科間のアイデンティティというんですか、違いについて指摘されていまして、それぞれについて各科から、またはセンター長の方から、ベンチャーマインドと、それからアイデンティティについてそれぞれご報告をお願いしたいと思います。

### No. 3・No. 7 機械工学科

【庶務課長】 初めに、持原教授からお願いします。

【機械工学科長代理】 今日は学科長がちょっと出張しておりますので、代理の持原がご報告させていただきます。

「ベンチャービジネスを目指す独自の技術者たちが数多く生まれてくるような高専の在り方を目指して欲しい。」というご提言でございますが、機械工学科では、創造性豊かな人材の育成を目指した学年対抗ロボットバトル競技の充実を図っております。これとリンクしまして、3年生の前期に「創作活動」というものがあります。これは、ある課題を設定しまして、既設の創作キットを用いて創意工夫を凝らしたオリジナルのメカニズムを持つようなロボットを作り上げていくという教育を行っております。これによって実際の機械の仕組みと運動あるいは力関係、そういったものの理解をさらに深めて、柔軟な発想能力を高める、いわゆる創造性を高める教育を行っております。

学年対抗ロボットバトルというのは、一応3年生は全員、それから学年代表で少なくとも2チームは競技に参加するというので、これは高専祭のときに学外の方にも見てもらって、公開されている中でロボットの性能を競うということでございます。

以上が、機械工学科の創造性を養うための教育でござ

います。

### No. 3・No. 7 電 気 工 学 科

【庶務課長】 次に、須田電気工学科長からお願いします。

【電気工学科長】 電気工学科の方から2つ続けてよろしいでしょうか。

【庶務課長】 はい、お願いします。

【電気工学科長】 ベンチャーマインドと3学科の類似性の点に関してご報告させていただきます。

ベンチャーマインドに関しましては、ベンチャーマインドを育てると意識をしているわけではないんですけれども、平成9年度にカリキュラム改訂をしたわけですが、これはほかの学科と同じなんですけれども、「創造実習」というものを取り入れました。ほかの学科では「創造教育」でありますとか「創造教室」でありますとか名前は違いますが、電気工学科では4年次に「創造実習」ということで、平成12年度から実際の「創造実習」が開始されました。

電気として取り組んでいるというのは、「創造実習」の中でいろいろなことをさせるということなんですけれども、資料2ページに書いてありますのは、これは本校全体で取り組みました理工系教育推進の創造教育推進プロジェクトの中で、特に文科省から予算をいただきましたので少し力を入れてやったというのが、ワンチップマイコンを利用した実用的な電子機器の設計・製作というところ。特に、ワンチップマイコンを用いますと、割あい複雑な機構の電子機器がプログラムだけでできるということで、いろんなアイデア、学生のアイデアを、実際に自分たちが作って、実現して、動作を確かめることができるということで非常に有効ではなかったかと、今後も続けていきたいと思っております。

しかし、いい点ばかりというわけではなくて、ご指摘のベンチャーマインドとか創造、独創性というものはどうかというところ、これは私が指導しているんですけれども、学生自身から本物の独創的なアイデアが出てくるかというところ、なかなか出てきません。我々

がいろいろなことを勉強して、こういうものもできるよ、あんなのもできるよというヒントを与えて誘導していくというのが現状のところあります。

実際の工業技術者ということを考えますと、その後ろの方に、今後の課題のところを書いてありますけれども、ヒントはそういうふうにもらっても、それを現実のものとして改良してよりよいものにしていくと、付加価値をつけていくということが非常に重要で、そここのところの教育はなかなか今のところできておりません。とにかく作ってみたい、もう終わっているという状況ですので、ご指摘のベンチャーマインド、独創性とはちょっと違うかもしれませんが、今後は、改良して信頼性とか付加価値を高めていく、そのためにどういうふうなことをしなきゃいけないか、そういうふうな方向に少し力点を置いていきたいというふうな方向に考えております。

それから続きまして、各科のアイデンティティということで、資料5ページの方に掲げてありますけれども、確かにカリキュラムが類似しているというご指摘でありますけど、今日は3学科の履修可能概要というようなものを見ていただきましたけど、そこにありますように、情報システム分野でありますとか、電気・電子分野でありますとか、エレクトロニクス分野でありますとか、機械工学科分野でありますとか、そういう分類をいたしますと、一応カリキュラム上の違いというのは出ていると思います。

ただ、やはり我々、中学校等へいろいろな人材を送り込みまして、中学校とかで学科の説明をするときには、学科はこういう形ですよと言うんですけれども、就職先はいろんなところに行けますよ。例えば電気でありましても、機械系でありますとか非電気系の会社に当然就職していく。情報工学科であってもそうですし、電子制御工学科ももちろんそうです。そういうことで、そういうところだけ聞くと余り差がないというふうにとられるということは大きいと思います。しかし、実際教えている内容に関しましては、共通部分はありますけれども、差は確かにあると思います。

アイデンティティといいますが、じゃ電気工学科とはどういう学科なのかということで、そこにありますように3つの分野をきちんとやりましょうということで、現在の電気工学の中では、昔は弱電と言われていました電



子工学の分野、半導体の分野、電子回路の分野ですね、それからエネルギーの分野、いわゆる電力、強電と言われていた分野ですね。それと、現在はどんな分野でも情報工学は欠かせませんので、その3つの分野をバランスよくやっていくということを本校の電気工学科の特長としております。

これは実は昭和38年に設置されたとき、既に本校電気工学科は強電から弱電までバランスよく教育するということが実際にもう既にうたわれておりまして、20周年誌、30周年誌でも書かれております。それを少し発展させた形で、そういう3つの分野をバランスよく教えるというのが電気工学科であるというふうに学科内で話をして、こういう形で現在、中学校等にもPRしているところでございます。

以上です。

### No.3・No.7 電子制御工学科

【庶務課長】 続きまして、同様な内容で児島電子制御工学科長にお願いします。

【電子制御工学科長】 児島でございます。

まず、ベンチャービジネス関係では、まずその基礎となる技術力を高めるために、ものづくり教育を中心としまして、授業の名前は「創造設計」という授業を数年前に立ち上げまして、3年生では全員にキットを与えて、1人1人の技術力を高めるという内容。それから4年生では、やはり「創造設計」ですけども、4年生はグループでそれぞれ課題を与えられたロボットを作る、そして学科内でロボコンをやるというふうなことをやっております。この方向性はいいと思って、今後も続けて発展させようと思っております。

それからベンチャーマインドという意味では、本年度、昨年4月から特別講座を立ち上げまして、5年生向けなんですけれども、主として企業の方に来ていただきまして、いろいろなベンチャーリング関係の話を5年生に受講させるようにして、これは非常に有効であると感じておりまして、今後もやっていきたいと思っております。

次に、学科のアイデンティティ関係ですけども、「電子制御工学科」とは、メカトロニクスを中心として1つのものを設計できる「オールラウンド・エンジニ

ア」という呼称で説明しておりますけれども、全国工業高専54校ありますが、この中で電子制御工学科がある学校が20校です。その20校のうち半分の10校がうちのように改組された学校で、他は新設された学校で、なかなか内容が違うんですね。学科がこれこれそれぞれというような現実でして、そこをもう少し共通な形にならないかなと今、検討している状況でございます。

以上です。

### No.3・No.7 情報工学科

【庶務課長】 続きまして、同様に山本情報工学科長をお願いします。

【情報工学科長】 それでは、資料の3ページのやや上寄りの方を見ていただきますと、(4)のところに「デジタル回路技術によるマイクロプロセッサを用いた回路設計」というのがございますが、情報工学科は、名前からしますとソフト主体の学科のようなイメージを受けられるんですが、これは本校の情報工学科を作るときに本来は「情報システム工学科」という名前にしたかったらしいんですが、当時の文部省は頭がまだ固うございまして、片仮名はまかりならんというお話がございまして、システムが抜けまして「情報工学科」となっておりますが、おります教官は一丸としてシステムエンジニアを育成していこうということでございまして。

まず、アイデンティティの方からまいりたいと思いますが、類似3学科の履修可能概要のところを見ていただきますと、情報工学科はブルーでといたしますが、空色で示しているのは、「情報システム」のところがちよっと飛び抜けていると思います。これはご指摘がございましたもんですから、3学科並べたんですが、学校紹介、中学生に話すときはこの情報工学科の分だけ抜き出したのを示して、決して情報システムだけやっているんじゃないんだよと、いろんなことを勉強して、その勉強した結果を組み合わせるってシステムというのを作るんだよ。だから、パソコンをいじるのが好きだからって、パソコンだけいじっているんじゃないんだよと、これを説明しているんですが、なかなか分かってもらえないというのが悩みの種といたしますが、入ってきた学生の何名かは一日中パソコンをさわれると思って入って

きたのに、「ああ、難しい電気回路とか電子回路の勉強をさせられる。」とか「数学の勉強をさせられる。」とかぶーぶー言うんですが、「それじゃ伸びないんだよ。」と言っても、なかなか分かってもらえないというのが悩みの種でございます。

それで、システムエンジニア、つまり既存の技術をいかに組み合わせる新しい機能を持たせるかということで3ページの方の、ベンチャーマインドとはちょっと離れる、その基礎になると思うんですが、マイコンボードを作らせているというのは、各学生に、ゼロとあります、小さなコンピューターの赤ちゃんですが、これをもう最初から最後まで1人でつくらせてみるということをやっているわけです。ですから、ハード設計から始めて、そのハードの上に乗っかるソフトも自分で設計して、作ったハードの上にソフトを乗っけてちゃんと動かかなという動作確認まで、1週間に1回ですから1年間かかるんですが、そういうことをやらせて、とにかく最初から最後までを体験させるということをやらせております。その過程で電子の知識とかいろいろの知識が要るんだということになるわけですね。

類似3学科の履修可能概要のところで見てくださいと、「機械工学」というところにブルーがちょこっとあるんですが、情報工学科で機械工学を、これは概論なんです、勉強させているのはほとんどうちだけじゃないかなと思うんです。そういう点でいきますと、単なるソフト屋じゃなくて、いわゆるシステムを組むために周辺も押さえた勉強をさせている。学生には不人気なんです、しかし将来の発展性を考えますと、好き嫌いを言わずにやっぱり教えておかなければいけないということでございます。

簡単ですが、以上でございます。

### No. 3・No. 7 土 木 工 学 科

【庶務課長】 続きまして、岡林土木工学科長からベンチャーマインドについてお願いします。

【土木工学科長】 土木工学科のベンチャーマインドの達成状況、これに相当するのは3ページの中ほど(5)に提示させていただきました。これはほぼ実現しているんだと思います。どんなタイトルにしましたかという、

「感性豊かな人材の創出を目指した意匠設計の実施」、こうさせていただいています。このバックアップは、実は熊本大学の建築工学科の先生のバックアップでさせていただきました。

それで、どんなものかといいますと、5年生で、これはトータルな考え方を取り入れてまとめた模型を作りますよというような実技をやるんですが、フィールドは天降川に公園があります。そこに5年生をバスで連れていまして、そして「ここであなたたちが設計をするなら、どういうふうな感性で公園を作るだろう。」ということで、最終的に模型を作ります。模型をつくった後どうということをするかという、模型ですから、人間がアリの視線で見る。それを今、カメラがありますから、そのカメラを使って模型の間をずっと動かしながら、その景観の中で、学生が設計したものがどれくらい感性豊かに実際にできているかと、そういうふうな体験をしています。したがって、5年生の最後のわずかな1単位なんですけれども、これは総まとめで非常にいいものだと思います。そして大学生には絶対真似ができないものは、感性が豊かな年齢にあると思います。ここに高専の特徴がある。1つはそういうような達成状況にあります。

そして、今後これをどういうふうに進展して、彼らをどのように感性豊かにするように育てようかというようなことを私どもは考えています。今後の課題は、これは実は土木工学科内での公開で最終的な発表会をやっていますので、もう少し宣伝を兼ねて彼らの目標にも上乗せできるようなそういう場所を提供しよう、それが我々学科長の役目だろうと思います。したがって、内外に向かって少し広げた場所を用意しようというふう考えております。

以上です。

### No. 3・No. 7 地 域 共 同 テ ク ノ セ ン タ ー

【庶務課長】 続きまして、テクノセンターで取り組んでいるベンチャーマインドにつきまして、西留先生よろしくをお願いします。

【地域共同テクノセンター長代理】 まず、テクノセンターの簡単な説明からさせていただきます。

テクノセンターは、平成9年に学内措置としまして創

造教育研究センターというのを設置いたしております。その後、平成10年3月には、地域との連携強化を進めていく中で「錦江湾テクノパーククラブ」を設立しております。平成12年4月に創造教育研究センターを継承して、九州地区の高専として初めての地域共同テクノセンターが設置されております。

この中で、地域共同テクノセンターは、地域交流部門、共同研究部門、創造工房部門、このそれぞれがありますが、3ページにございますように、創造工房部門等が中心となりまして、3ページの一番下側なんですけど、毎年学外団体との共催事業として本校と鹿児島市立科学館との共催事業としまして、小・中学生を主対象としましたイベントを行っております。これには学生が説明に当たっておりますので、学生のそういうベンチャーマインドを高めていきたいと思っております。

以上です。

## 専攻科

【庶務課長】 ちょっと飛んで申しわけなかったんですけども、平田専攻科長から専攻科につきまして、大学院進学、学科・専攻科の棲み分け、研究業績等につきましてご説明をお願いいたします。

### 評価及び提言 No. 8

【専攻科長】 私の説明は、専攻科、授業評価と大学院進学、学科・専攻科の棲み分け、それから研究業績に関してでございます。

前回の会議のときに委員の先生方から提案していただいた項目が一番後ろについておりますけど、それに対してどこまでやれたかというのについて、真ん中の「評価及び提言に対する達成状況」ということで説明いたします。

6ページをお開きください。

専攻科に関してです。ここでは、専攻科はできたばかりでまだ就職とか進学というのは出ていませんが、委員の先生方の関心といいますか、最大の課題は専攻科教育の充実であるということで、それが出口のところでは就職や進学にどうだということで、このことについて専攻科担当の教官は一層頑張れという激励をいただいております。

専攻科の充実ということに関しては右の方に書いてございまして、「それぞれの担当教官が専門分野における

研究活動の積み重ねと、そこで得られた新しい知見を教育の現場に反映するなどの工夫を重ねながら、学生のパワーアップをサポートしていく必要がある。」ということで、全教官で取り組んでまいりました。

それから就職に関しては、専攻科の宣伝用パンフを作る必要があるんじゃないかということで、これは平成12年4月にパンフを作りまして、現在もパンフ改訂版を作成中でございます。

それから専攻科に関してはFD委員会において、授業評価アンケートを専攻科でも今年度後期から実施して、分かりやすい授業を目指しております。

課題としては、14年度に専攻科棟ができたんですが、専攻科教育の充実に努めてきておりますけど、まだ必ずしも十分でございませんので、特に今後はJABEE認定に向けて一生懸命全校挙げて頑張っていく予定です。専攻科教育システムも、それに向けてハード面及びソフト面から継続的に改善していかなければならないという課題でございます。

### 評価及び提言 No. 9

それから大学院進学に関しては、これは学生が編入してそれから大学院に行くという者、直接本校専攻科を卒業して大学院へ行くという者がいる。その兼ね合いを考えていく必要があるんじゃないかということでございましたが、平成14年3月に初めて専攻科修了生を出しております。そこでは大学院には21名中6名進学いたしました。それから本年度は22名中2名進学いたします。他大学に編入していった学生との問題で、大学院進学者の方が有利であるんじゃないかということですが、本校の専攻科卒業生の大学院希望者はほとんど全員進学しているということで、余り問題にはなっていないんじゃないかと。現段階では大学編入学生もまたかなりいますので、大学と大学院、どちらも希望したら進んでいって、特段問題は生じていないだろう。ただ、専攻科の充実を考えるとときには、専攻科卒業生で大学院に進学した者に対しては追跡調査を行って、その調査結果を踏まえてこれからの指導に生かしていく必要はあるんじゃないかと考えております。

### 評価及び提言 No. 10

学科・専攻科の棲み分けについては、特にJABEEの認定の問題が出てきまして、専攻科と本科の4年・5

年生が対象とされておりまして、それに向けて今、最大目標として頑張っている状況でございます。特に4年・5年、それから専攻科1年・2年の教育のあり方については、十分時間をかけながら検討していく必要があるのではないかというふうに認識しております。

それから少し、先ほどの進学・就職のところでもちょっと言い忘れましたが、就職の状況は非常に厳しいんですが、土木工学専攻の場合、公務員希望がどうしても多いんですが、今年度鹿児島県の上級に2名通っております。これは大学生とまさに競争して2名合格しているという状況で、大学院にもよく入っているし、公務員の上級にも大学生と競争して入って入っているという状況は、専攻科という点では大学生と何ら変わりはない、遜色のない状況にあるということの1つの証左ではないかと思っております。

#### 評価及び提言 No. 2 4

それから研究に関してですが、委員の先生から、技術専門の教官は2～3年に1つぐらいは学会に論文を出しなさいという話が出ました。専攻科も5年後には、平成17年度は見直しがございます。それをらんで、教科の先生方に査読論文を出すように頑張ってくださいということをやっと言い続けております。ところがやっぱり大学と高専の場合、高専の場合は時間的制約をかなりとられて、なかなか先生が忙しくて研究業績を上げるというのはなかなか困難な状況でございます。立場上、私は研究リストの充実頑張ってくださいということをおっしゃられた覚えはないんですが、今後の課題のところでも触れていきますけれども、やはり研究に対する研究活動の必要性というのが本校全体のコンセンサスとしてまだできていないところがあるなあという気がしております。そこを克服する必要がある、それが大きな課題であろうというふうに思っております。

以上です。

#### 地域共同テクノセンター

【庶務課長】 続きまして、先ほどお願いしましたけれども、地域共同テクノセンターについて西留先生から、センターとの連携、ロボットにつきましてお願いしたいと思います。

【地域共同テクノセンター長代理】 11ページをごらんいただきたいんですが、その前に資料6というのがございますが、「文部科学時報」ということで、特集で「高等専門学校40年」ということで事例紹介の3の34ページのところに出ていたんですが、鹿児島工業高等専門学校の産学官連携ということで、今までのセンターとそれから錦江湾テクノパークの事例紹介と詳しく書いてございますので、またゆっくり読んでいただくとありがたいと思います。

#### 評価及び提言 No. 2 1

そこで、先ほど教務主事から11ページの高校との連携ということでオープンカレッジについては説明していただきましたが、センターとの関連はどうかといったことで、横長の11ページの2の方なんですが、科学技術週間の講座を開いております、平成13年・14年度に科学技術週間というのが4月に毎年行われているんですが、そこで中学生と高校生を対象とした「新世紀の創造的技術者を目標して」ということで実施いたしております。今後も続けたいとは思っているんですが、さらに課題としまして、工業高校と連携を図って授業の一環としての技術講座も開設していこうかなという計画をいたしております。

#### 評価及び提言 No. 4 1

それと最後の、提起をいただいている41番ですね、17ページになるんですが、枯れ枝を切り落とすロボットを開発してはどうかというご指摘をいただいていたんですが、平成13年度の第1回かごしま産業支援センターの「学生ベンチャービジネスプランコンテスト」に「ワシントン椰子の枝払い」ということで最優秀賞をいただいて、そのロボットを実現しようということで学生の卒業研究で取り組んでおったんですが、平成15年度にある地元の企業と実際の共同開発をしまして、平成15年度末には製品化する予定になっております。

以上でございます。

#### F D 委員会

【庶務課長】 続きまして、佐々木FD推進委員会委員長から、学生アンケート、評価マニュアル、授業評価、卒業生へのアンケート、出口試験といった内容につきましてご報告をお願いします。

#### 評価及び提言 No. 11・No. 12・No. 13

【FD推進委員会委員長】 FD関係について、資料1の7ページをご覧くださいと思います。

7ページの上の方に、さっきも話が出ました、授業が分からない学生に対応する1つの方策として「オフィス・アワーズ」というのを設けて、この時間帯は必ず教官が学生の相談に応じていただくようにしております。

それから下の方に評価マニュアルというのがありますが、実はさっきも話がありましたように、平成13年度、平成14年度、既に4回、全学生による評価、さらに教官も全教官にわたって実施してまいりましたけれども、マニュアル等の方もほぼでき上がっております。実際の中身は次の8ページの上の真ん中にございますが、マークシートで10項目について、この教科の内容はどういうものであったか、この授業は分かりやすかったか、教官の話し方は分かりやすかったか、板書は適切であったか、授業の進みぐあいはどうか、そういう10項目について5段階で評価いたしております。さらに、うちの特徴は記述式のものも取り入れておまして、授業でよかった点、教官に希望すること、意見があれば自由に書いていただくという形で、記述式も併用いたしております。

これらの結果はFD委員会ですべて集計・分析いたしまして、校長の方からすべて目を通していただきまして、校長のコメントつきで各担当教官にフィードバックされるようにしております。また、この結果に基づいて、校長による授業参観とか直接の教官の指導というのを実施いたしております。

#### 評価及び提言 No. 14

それから卒業生へのアンケートですが、これは40年史の一環として全卒業生を対象にしてアンケート調査を実施しまして、現在そのデータの分析中でございます。

#### 評価及び提言 No. 15

それから出口試験ですが、8ページの下の方にありますように、外国語（英語）、ことしからTOEICが入りますが、数学系の基礎1、物理・化学・応用物理の基礎2、それと専門科目を共通かもしくは3つの分類に分けて、これだけのものを昨年試行的に実施し、さらにことしは本格的に実施いたしております。5年間の学習の定着を確認するような内容について、現在、総合学力試

験の方の教務の専門委員会ができてまして、担当してやっております。

以上です。

### 技術室

【庶務課長】 次に、松元技術室長から研究教育支援ということでご報告をお願いします。

#### 評価及び提言 No. 29

【技術室長】 資料1の14ページをお開きください。

従来技術職員というのは各学科に張りついておまして、実際に定期試験の内容が分からないというような事実でございました。ただ12年度の4月に技術室ができてまして、全技術職員をそこに集めました。その際、各技術職員の業務内容についてすべて洗い出して、文書化いたしました。その後、12年度・13年度・14年度の各技術職員の教育支援に関することは技術室の運営委員会で随時報告いたしておきます。独法化に向けて、技術室の中間目標になっております、学科を越えた技術職員の教育研究支援というのがございます。それに対しましては、技術室に教育支援プロジェクトというものを立ち上げて、今、検討しております。

以上でございます。

### 施設委員会

【庶務課長】 続きまして、施設委員会関係で小西会計課長から、部屋の稼働率、またピロウの木等について、ご報告をお願いします。

#### 評価及び提言 No. 38

【会計課長】 会計課長の小西でございます。

資料の16ページをごらんいただきたいんですが、ご指摘いただきました部屋の稼働率の調査は継続的に行うようにということでございまして、私どもの方といたしましては部屋の稼働率を継続して調査をしておまして、特に専攻科が認められまして、建物ができるまでの間ということで、平成13年の6月11・12日につきましては、校長先生を筆頭に各部屋すべてを回りましてそういう調査を行いまして、ご指摘のように、私どもの部屋につきましては狭隘化、それから老朽化の著しいところもございます。教室についてもまだまだ狭いところがありまして、教育環境改善で校舎改修等を要求していたと

ころでございますが、そういったことを踏まえて全体を見直しまして概算要求を新たに作成し直して提案したところでございます。

その結果、右の方にまいりますが、平成14年度の補正予算がことしの1月に認められたわけですが、電気工学科棟と機械工学科棟の校舎改修が認められました。残念ながら、そのときの要求で総合研究棟もあわせて要求していたんですが、まず改修からということでスタートいたしましたので、本年度改修工事が始まりますが、特に新しい建物ができるまでの間はまたまた部屋が窮屈になりますので、調査を継続しながら狭隘化等に対応していきたいと思っております。

#### 評価及び提言 No.40

また、40番のキャンパスに植えられたピロウの木の枯れ枝が苦しいというご指摘でございますので、これにつきましては一昨年予算措置を行い、一たん剪定作業をしたところでございますが、もう既にまた丸く垂れ下がっておりますので、キャンパスアメニティの向上ということで環境整備は校舎改修も含めまして適切な予算措置をして、そういう剪定については今後とも続けていきたいと思っております。

以上でございます。

### 事務部

【庶務課長】 続きまして事務部につきまして私の方から、PR、自己研鑽、合理化、公務員志望、事務という項目につきまして、ご説明申し上げます。

#### 評価及び提言 No.23

資料の12ページの23番、PRなんですけれども、PRをなさないと、新聞等にいろいろコマーシャルを載せなさいというご指摘だったんですけれども。資料7をお配りしているんですけれども、本校の過去2年間の記事等ということで、これをちょっと説明したいと思います。

1ページ目は、これはテレビで放映された分でございます、過去2年間でございます。全部で5本ほどありまして、それぞれNHK、KTS、KYTということで取り上げられております。また次のページの、南日本新聞で取り上げられた記事がこのように22本ありまして、太字で書かれたものにつきましては、次のページから実

際の記事を新しい順に載せています、最近の順番ですね。この記事の番号につきましては、初めにあります左肩に書いてあります番号と一致しておりますので、そこでごらんいただければと思っております。

最近の記事では、10番目にあります「国立高専の法人化へ」というようなことで載っております、これにつきましては、ここにお配りしました国立高専の法人化、最終報告ですね。資料4「国立高専学校の法人化について」というものを、今後の国立高等専門学校の在り方に関する検討会の資料を添付しておりますので、これも併せてご覧いただきたいと思っております。

それから最後の2枚目ですね、これにつきましては、高専関連記事としまして「南日本新聞」以外に各新聞社で流れた記事につきまして当課で集めまして一覧表にしております。そういう意味で、幅広く学生の活動、それから教官の研究活動につきまして取り上げていただいたものと思っております。特別予算を持って新聞社にPRのことをしたということはありませんで、あくまでも実質上の実績でPRしていただいたということになっております。

それからまた、現在あるホームページをことしの4月にリニューアルする予定にしております。ホームページの開設の責任者をきちっととらえた上で、さらに新着情報なり、迅速なPR活動に努めていきたいと思っております。今後は、独法化も視野に入れまして、情報の発信体制をさらに組織的なものとして位置づけていきたいというふうに考えております。広報紙等の統合等についても考えております。

続きまして、自己研鑽、事務職員・技術職員につきましてはの自己研鑽でございます。

#### 評価及び提言 No.27

13ページの27でございますけれども、自己研鑽につきましては、今年2月で各事務官・技官の自己点検・評価というものを実施しまして、メールで送っていただきまして、過去2年間の業務改善への取り組みや工夫、研修への参加状況、業務改善への提案についてそれぞれ書いていただきまして、それぞれ部課長で今見ております。

それぞれ自己研鑽等におきましては、例えば放送大学の簿記の研修をしたり、技術的なものの研修をしている

ということをいろいろ書かれていまして、かなりそれぞれ十分自己研鑽を深めていると伺っております。また、業務改善への提案につきましても、我々の方ではちょっと把握しにくい小さなこと、大きなことにつきまして提言されていますので、今後の改善に役立つと思っています。また、それぞれ改善が大きく取り上げられたということにつきましては、個々の職員の処遇改善にも結びつけられればというふうに考えております。

#### 評価及び提言 No. 28

次に、28の合理化でございますけれども、これまでも学内LANの導入とか、それから電子計算機の汎用システムによる事務の省力化を進めまして、ペーパーレス等、業務のかなりの部分が効率的にできるようになっております。しかしながら今後それ以上に、待ちかまえています独立行政法人化とかJABEEへの対応、国際交流、産学官連携、情報公開等につきまして、ますます事務職員の企画能力とか情報処理能力、コミュニケーション能力、それから会計能力ですね、法人化になりますと企業会計原則が要求されますので、今、特に会計職員全員、簿記の3級・2級を取るということで頑張っております。また、英会話研修等につきましても、今後考えていかなければならないというふうに思っております。

#### 評価及び提言 No. 30

次に14ページの30、公務員志望ということで、本学の学生に我々が公務員になるための実務教育をしてはどうかというご提案でございましたけれども、実際には本学の学生に事務職員・技官が直接そういう取り組みをした実績はございませんでした。ところが、今後、教官と事務官の仕事の区別というのがだんだん競合する部分が出てくるかと思っております、特に事務官の能力を上げてスタッフデベロップメントといいますが、資質の向上を上げて、ご提言されたような学生への支援について、学生相談、課外活動、学生生活、就職支援について、より深く踏み込めるように努力したいと考えております。

#### 評価及び提言 No. 34

最後は、重要なことが余りこの間の報告書の中になかったということなんですけれども、今までのご報告にかえたいと思っております。

以上でございます。

## J A B E E 委員会

【庶務課長】 続きまして、最後になりますけれども、JABEEに関しまして池田JABEE委員長からお願いいたします。

#### 評価及び提言 (13)

【JABEE委員会委員長】 資料1の17ページ、それと資料3も併せてご覧いただきたいと思います。

「JABEE」という言葉はもう何度か既にお聞きになっていると思いますが、JABEEの意味は「日本技術者教育認定機構」の略称であります。この制度は、大学とか高等教育機関が実施している技術者教育プログラムが社会の要求水準を満たしているかどうかを公平に評価して、その要求水準を満たしている教育プログラムを認定する制度です。

資料3を見ていただきますと、本校が今までJABEEに取り組んできた大まかな経緯がまとめて書いてあります。

平成13年6月26日にJABEE委員会を発足させまして、第1回の委員会を開きました。

7月3日に鹿児島大学の門先生に来ていただきまして、JABEEとはどんなものかということを含めまして、鹿児島大学が受けたJABEEの試行審査のことについていろいろお話を伺いました。

それから、例えば10月19日、本校の学習教育目標の第1回目の協議をいたしまして、11月27日に鹿児島高専の学習教育目標というのを、「Office」というのは電子掲示板なんですけど、こちらの方に公開しております。

12月21日に学生にJABEEの教育目標について説明いたしました。

さらに、翌年になりますが、平成14年4月、このときに学生に対して本科の4・5年生、それから専攻科の学生にもオリエンテーションで学習教育目標というのを説明しまして、もちろんそのときに合わせてJABEEというものについても説明しております。

その後、審査員養成研修というのがありまして、そちらの方に平成14年10月21日と11月11日に2名ずつ参加しております。これは主催は日本工学教育協会というところで、私どもが受審しようというところは融合・複合というところですので、工学教育協会が担当し

ているというわけで、そちらの研修会を受けました。

それ以外に、遡りますが、平成13年12月23日に電気情報通信学会、それから今年の12月21日から22日にかけて電子情報通信学会の審査員養成研修にも参加しております。

今後の予定ですが、今月下旬、25日にJABEEの審査を来年度受ける予定の大学、高専のプレビューといひまして予備審査がございます。それ次第ですが、それにパスしますと、本審査を受審するという申請をいたしまして、恐らくことしの10月ないし11月に実地審査があるものと思われれます。

以上です。

### 休 息

【庶務課長】 ちょうど1時間10分ほど経過しまして、ここで一度、休憩時間にしたいと思っております。

10分ほど休憩しまして、3時15分からということによろしゅうございましょうか。

どうもお疲れさまです。

### 休 憩

### 再 開

【庶務課長】 それでは、再開したいと思います。

今まで報告したことにつきまして、委員の方からいろいろご質問なりご意見をいただきたいと思っておりますけれども、どういたしましょうか。個別に手を挙げていただくという方法によろしゅうございましょうか。それとも一人一人ということの方がよろしいでしょうか。いかがでしょうか。

### 迫 委 員 か ら の 意 見 と 応 答

【庶務課長】 では、迫委員の方から順番ということで、何かもしご意見とかあれば、よろしゅうございましょうか。

【迫 委員】 それでは、ご指名ですので口火を切らせていただきたいと思っておりますが、実は私は前回のこの会議に出ていないので申しわけないんですが、どうしても何か提案をしろと、意見を述べるということでありましたので、メールで実は送らせていただいたようなわけなん

です。

その中で、ワシントン椰子の枝を切り落とすロボットを学生の課題として開発されたらどうでしょうかということをご提案させていただきました。

実はこの木は、鹿児島県内、南九州一円にたくさんあるわけですね。非常にきれいにメンテナンスされているところと、全くされていないところといろいろあるわけですが、鹿児島市内でもよく手入れされたところと手入れされていないところとあるんですが、それぞれ理由があるんだと思いますけれども、私は何かそれを開発されるとビジネスになるんじゃないかなあというふうに思ったわけなんです。

それで、そういう提案してましたら、一昨年の学生ビジネスプランコンテストに当高専から提案がありまして、私が取り組んだらどうですかといったことが提案されてきたもんですから、私は主催者としてまた審査員の1人として、これは採用しないわけにいかないということで特別賞を差し上げたわけですが、それは私が決めたんじゃないで、当然外部の審査員も入れて審査してもらって、その中でもやはり得票が一番高いものでした。

今、学生たちの提案を聞きますと、ここにも赤坂先生とか門先生とかかなりの工学部の先生方がおられるんですが、学生たちはもうITの提案ばかりしてくるんですね。ITを使って何か商売しようというような話。これは悪くはないんですが、ものづくりという提案がないわけですよ。その中ではやっぱり光った提案だったように思ひまして、それで最高賞を差し上げるということになったんです。

私はちょっと個々の先生には時々会うたびに申し上げているんですが、早くしないと、だれか真似する人がいたらビジネスにならないよということを申し上げていまして、ちょっと時間がかかり過ぎじゃないかなというのが率直な感想です。もしこのくらいのアイデアでこのくらいの製品だったら、僕は中国の人がこのアイデアを聞いたら3日ぐらいで作るんじゃないかと思いますが、その点、少しのんびりし過ぎじゃないでしょうか。

先ほどの説明で、企業さんとの共同開発で15年度末には作るんだというお話を聞きましたが、15年度末といたらあと1年かかるわけですね、そうですね、来年度ですからね。やっぱりちょっと時間がかかり過ぎ



じゃないのかなというふうに思います。

実は審査員の中に企業の方もおられて、高専として技術的なアドバイスが欲しいということであれば、共同研究してもいいですよというのが審査会の会場でも実は話が出たんですが、応援したいという企業はございますので。先ほどの話ではもう企業は決まっているようなお話でしたのでそれについて特に意見はないですが。とにかく急いで、本当にビジネスにして欲しいなと思います。

ちょっと半分は苦言なんですけど、急いでくださいということと、僕はビジネスになると思います。公共の機関等は街路等に植えていますと、どうしてもああいう木はメンテナンスしないと、本当にあれは車を傷つけたり人を傷つけたりする可能性もある。非常に我々の大人の腕よりも太いぐらいの枯れ枝でございますので、よく落ちているのを見ることがありますが、そういうシステムができれば、それが数台あれば、全部にメンテナンスして結構なビジネスになるんじゃないかとそういうことが考えられますので、是非実現して欲しいなというふうに思っておりますので。とりあえずこの意見を申し上げます。

【庶務課長】 ありがとうございます。

もっと早くしてビジネス化したらどうかというご提言だったと思いますが、西留先生、その辺何か情報がありましたら。

【地域共同テクノセンター長代理】 もう早速取り組んでおりますので、技術室も一緒に協力いただいておりますので、15年度末と言わずに早目にやります。

【迫 委員】 実は林業では枝打ち機というのはあるわけですが、私は、そういうのがあるので、杉の木やヒノキみたいに素直な木ではないんですけども。

【地域共同テクノセンター長代理】 掴んだまま持っておりますような格好にしようかと思って、いろいろと。

【迫 委員】 工夫の仕様ですね。だからこそビジネスになると思われますので、是非。応用の問題じゃないかなと思いますので。

【庶務課長】 ありがとうございます。

門委員の方から、次、よろしく願います。

### 門委員からの意見と応答

【庶務課長】 門委員の方から、次、よろしく願います。

【門 委員】 今、迫先生のご指摘の話は大学でも非常に耳の痛いところがありまして、というのは、研究開発が主眼じゃなくて、学生がそれを主体的にやるというような教育という部分を必ず裏打ちして進めようとしているもんですから、だからなかなか企業なんかの発想と大分違っている難しい部分があるなあとというふうに自覚しているんですが。

私はちょっと今回の話で、私は今回初めて参加させていただいたんですが、J A B E E 絡みということで、教育に関連したことでちょっとご意見を述べさせていただきたいと思うんですが、今回この資料を見させていただいてもう一つ、全体としては物すごくいろいろ頑張っておられるということで、いろいろすばらしいなあと総合的にはそういう感想なんですけど、1つだけちょっと気になることがあるんですが、それは、教育目標が設定されておいて、その教育目標を達成するために教員団がいるわけですね、教員団というものの顔が見えないというのが非常にちょっとこの資料の中では気になりました。

シラバスの中には、それぞれ学科ごとあるいは一般教育の教育目標というのが明確にイメージされておりまして、それでそういう形は教育目標なりそういうものはそれぞれ書かれて、構成されてはいるんですが、例えば機械工学科の教育目標を具体的にはどういうふうに担っているのかという部分がよく見えてこない。シラバスの中で、本科目の目標というのは、この科目の中の目標を書いてあるんですが、この科目によって、学科のあるいは高専の教育目標のどの部分を担おうとしているのかというふうなところがよく見えないんですね。

それからオフィス・アワーズの話を先ほどからされていきましたけれども、シラバスには明示されていなくて、オフィス・アワーズをどういうふうに学生に公表されて、実効をどういうふうなことを上げておられるのかという面がまだ分からないというところですね。その辺が少し

気になるころだと思いました。

教育というのは、現在、大学の場合は、高専さんや小・中・高なんかでもそうなんですが、全然違う歴史を持っているといえますか、大学の場合は、基本的には科目を担当している人が、内容についても、評価についてもすべて実権を持ってあって、すべてやってきた。ですから、「鹿児島大学の教育といたら何ですか。」と言うと、「授業をやっている人の集合体です。」というぐらいの言い方しかできないような。今までの教育は。それではいけないということで、大学で目標を設定して、共通科目も専門もそれぞれ目標を設定して、その目標を担う形で担当者はそれぞれ分担をしていくという意識を持って組みかえようという、大学の場合はまだ過渡的なところであったんですが。

高専さんの動きというのは、むしろ非常に強いリーダーシップできちっと末端までやろうというようなところが非常に強く見えて、それはそれですごくいいなあと思うんですが、それをバックアップする教育、教員団の動きというか、例えば科目群ごとにそういう目標を担うためにはどういうふうなカリキュラムを作るかとか、どういうふうに学生に勉強させるかというような、そういうような取り組みの部分がよく見えない。それが実際に活動されて、それが実際に効果を上げたかどうかというのが評価だし、評価をしたら改善をするのはトップの校長とか、そういう上から「こういう改善をなさい。」ということになるんだろうと思うんですが、その部分が、一番実行母体のところが何かもう一つ見えないので、ちょっと見える形にされた方がいいんじゃないかと、それが一番感じたところなんです。

【庶務課長】 ありがとうございます。

2点ほどご指摘があったんですけども、教育目標を達成するための教員団の顔が見えないということ、それからオフィス・アワーズについて学生にどのように公表しているかということについて気になるということなんですけれども、その点について、JABEE委員長の方から。

【JABEE委員会委員長】 JABEE担当の池田からちょっとご説明をいたします。

まずオフィス・アワーズのことですが、私が知る限り、最近では学生にはPRしていません。ただし、教室室すべてにオフィス・アワーズの掲示がありますし、あれを作るときにそういうことは学生には通知したと思います。

それから高専の場合にはクラス担任制が、本科の方までですが、しっかりしておりまして、クラス担任を通じているんなことも連絡しております。

それからあと教育者の、教員団の顔が見えないというご指摘ですが、一応シラバスに書いてあります学習・教育目標とその科目内容との関係から、それぞれの教員は、自分は全体の学習教育目標のどこを担っているということはもちろん認識があると思います。

教育効果についての検討ですが、高専の場合は、高専といいますが、うち独自のシステムのようなのですが、定期試験といいますが、中間試験あるいは期末試験ですが、それが終わりましたら成績会議というのを開いております。そこでクラス担任あるいは教務主事を中心としまして、あとクラス担任が中心になりまして、教育効果について検討しております。そういうフィードバック機能があります。あと教務委員会とかそういったところ、あるいは共通の、例えば英語とか数学とかそういう一般科目の先生方は学科間でまた話し合いをしているといったそういう形ですね。

ここには資料がありませんが、そういうことはもういつもやっていることですので、あえて出さなかったというところもあります。

以上です。

【庶務課長】 ちょっとそれるかもしれないんですけど、資料2に「鹿児島高専の目的、理念等の相関(案)」とこのを出させていただいているんですけども、ここでいろいろ本校の、これは案でございまして、皆さんにお配りするのは初めてという形なんですけど、これを今、校長補佐連絡会で吟味してまして、いろいろご意見を伺いながら、これからまた独法化との関係で修正して、いいものにしていこうとしているんですけど、その中で高専の目的が、これは法律的に縛られるものですけども、その下に高専の教育理念、これは平成9年にある程度固まったものがありましたので、それをベースに2つ

の理念というんですか、「幅広い人間性を培い、豊かな未来を創造しうる開発型技術者」、それから「教育内容を学術の進展に対応させるため、また特別の事項について必要な研究を行う」というような理念を設けて、その下に3つの目標をつくったというような形でありませう。3つの目標の3番目については、J A B E Eに対応したり、学習・教育目標とか、それから教育・研究の質の向上とか、地域交流、国際交流というように示しております。

それをトータルしますと、中期目標・中期計画に反映されていると、それについては外部評価、また自己点検・評価についてフィードバックしていくというような関連にしておりますけれども、これをもう少し教員の顔が見える形でオープンにしていくというような形が必要になるのかなというふうに感じておりますけれども、そういうことでよろしいでしょうか。

【門 委員】 J A B E Eの本審査を受けられるということですので、そういう観点からすると、要するに教育を運営するためのシステムが見えるという、システムが見えるように、これは理念とかそういう部分ですので、これはこれの1つの流れですが、これを支えていく教員団とかそういうやっぱり組織がどういうふうに機能して動いていくかというシステムをきちっと持てるような形にされた方がいんじゃないのかな。

【庶務課長】 さらにこれを発展させたものですね。分かりました。ありがとうございました。

そのことにつきまして何かございますか。

【専攻科長】 今、先生がおっしゃることは、実行プログラムみたいなものが必要だというお話でしょうか。

【門 委員】 実行プログラムというよりは、端的に言うと、何か委員会がどういうふうに機能を担って、どういうふうに指導して流れているかというようなものですね。イメージとしてはそういうようなものです。委員会だけではないんですけれども、教員団、教員団と言っても学科のそれぞれ科目分の教員団とか、そういうふうな形でどういうふうに機能しているかということがやはり

分かるような形で整理されておると非常にいいんじゃないかと思うんですが。

【庶務課長】 分かりました。新たな提案としてまたこちらの方で検討していくということで。

【J A B E E委員会委員長】 一応組織図というか、その関係図の方は我々も作り上げていまして、やっぱり中心になるのは教務委員会あるいはここにいます、まず校長にすべてが出てきますので、例えば学生アンケートについてはFDで担っていくという、それは教官と学生に戻るとか、成績に関しては成績委員会を通じてまたフィードバックであるとか、そういうシステムは一応できております。

【庶務課長】 校長先生の方から何かありましたら。

【校長】 J A B E Eではそういうことが特に指摘されると考えています。今、池田J A B E E委員長が表を示しましたが、あれをもう少し何かテーマごとに分かるような表示の仕方をして次回ご説明したいと思います。ありがとうございました。

### 赤坂委員からの意見と応答

【庶務課長】 それでは、この件に関してはこれということで、次に赤坂先生の方からお願いします。

【赤坂委員】 私は2年前のこの会に出席させていただきましたけれども、そのときの提言を表にまとめられて、それぞれに対してきちんと対応されているということで、そのことに関しては、大変敬服いたしました。

先ほど資料2が、1でちょっと説明があったんですが、これを見ていまして、鹿児島高専の教育理念というのがあって、1番目は大変分かりやすく、こういったことは何があったと覚えているんですが、2番目の方ですね、「教育内容を学術の進展に対応させるため、また特別の事項について必要な研究を行う」という、その「また特別の事項について」ということは、これをちょっと読んでいましてこれはどういうことなのかなあと。

「教育内容を学術の進展に対応させるため必要な研究を行う」というのは分かりやすいんですね。教育というものが学術の進展と対応しなきゃいけないと、そういった意味での研究を行うんだというようなそういう説明は分かるんですけど、「また特別の事項について」というのは、ちょっと読んでいて分かりにくかったというふうに感じました。

それから独立行政法人化ということがございまして、高専が全高専をまとめて1つの法人格を持つのだとそういったことになりますね。

ということになります。この時期はいつになるんですか、もう決まっているんですか。

【事務部長】 大学と同じでございます。

【赤崎委員】 16年4月1日ですか。そういうことで、時期的に大変切迫しているということで、是非その対応をきちんとしていただきたいというふうに思います。

また、国立大学と違いまして、全体をまとめて一法人化ということですから、そういった制度的な内容がかなり違うんだろうと思いますし、またその方針などの調整のあり方といいますか、これまでのようなやり方なのか、法人全体として何らかの全体的な方向性といいますか、そういうものが出されて、その中で各高専がどういったことをやるのかということになるのか。これはこれからの高専にとって大変基本的な問題で、方針決定ということは大変基本的な問題じゃないかというふうに思います。

それで、そういった点にもちょっと関係するんですが、先ほど教育と研究のことについてお話がありまして、高専の場合には特に研究ということをどういうふうにするというコンセンサスがまだないんだということ、そういう説明があったわけですね。そのあたりをどうするのかですね。

大学と高専との違いということもありますし、高専は高専としての独自のやり方があるんだということですから、そういう中で教育が主体であるということもあるんだと思うんですが、研究をなさっている方もいらっしゃる。やはり高専として研究をどう位置づけるかということですね。それはやはり高専としての技術系のきちんとした位置づけが必要なのではないか。研究を重視すると

いう意味じゃないんですけども、高専としてまだその研究に対する位置づけがはっきりしていないということがやっぱり問題ではないかなと思うんですね。そういった点は、やはりそういったような独立行政法人化とか、そういった制度設定とも関係があるのかなというふうに思います。

それから専攻科については、J A B E Eに取り組みまして非常に熱心になさっているというふうに思うわけですけど、3つの分野があってそれぞれの学生定員もそう多くないということで、少数の学生に対応させて、かつまた各分野のJ A B E E対応をするというのは大変なことだなというふうに感じるんですね。その辺もやっぱりそういう方向になるのか、あるいは独立行政法人化の中で特定の分野の専攻科をちゃんとまとめるとか、何かそういったようなことがあるのか。現状でたしか3つの分野があると思うんですけども、それぞれで取り組まれるというのはなかなか大変だなあということを感じました。

それから先ほどオフィス・アワーズのことがありましたけど、こちらの自己点検・評価報告書の中をちょっと見てみますと、そこにオフィス・アワーズのデータが出ておりますけれども、その時間に学生が行っても教官がいないというようなそういうパーセンテージがかなり高い数字が出ていたように思っていて、その辺についてやはりもう少しその趣旨を徹底していく必要があるんじゃないかなというふうに感じました。

それと4ページのところで「今後の課題」として、5の「必修・選択」のところで、「2、3年内に抜本的なカリキュラムの改訂が必須となる。」とありまして、「2、3年後」、「2、3年内」というその辺の意味なんですけど、どうして「2、3年内」ということになるのかというのがちょっと分かりにくかったもんですから。

それから8ページのところで、総合学力試験という独自のことを、これも前回の有識者懇談会によってこういったことをお話しされたということで、その位置づけがちょっとはっきりしないということがあったわけですね。どれくらい学生が熱心にそれを受験するかというようなことがございますけれども、例えば成績優秀者は校長が表彰するとか、何かそういったような制度があったらどうかとそんなことをちょっと考えました。

それから学寮のチュートリアルをなさっているということで、こういったこともあるし、またオフィス・アワーもあって、いろいろと学生との対話の機会をたくさん持っていらっしゃるということは大変いいんじゃないかと思います。

それからロボコンのところの説明で、保護者の支援の会があるんだというお話がございましたけれども、ロボコンというのは、高専のロボコンというともう誰でも知っているというぐらいにだんだんできて、それが保護者の会といいますか、そういった支援がないとそういうのが余り、経費の面とかいろんな問題はあるんだと思うんですけども、そういうのはやっぱりちょっとどんなものかなあと。これはやっぱり高専の非常に大事な社会的に認知されたものですから、もっとやっぱり国の支援をちゃんと獲得するとか、何かもっとそういうのはちゃんと国が支援していいんじゃないかなと、そんなことをちょっと感じました。

それから国際交流の件がちょっとありまして、新聞記事になってしまったと、よくない面がなってしまったということがありますが、いろいろ国が言ってくるわけ、国際交流を推進しなさいとか、一方で、そのためのそういう留学生をサポートするような人材はちゃんと確保できているのかとか、それが入れるようなちゃんと受け入れ施設があるとか、そういった点については非常にお粗末なわけで、その中でやっぱりこういったことが出てくるんじゃないかなというのがあるって、その辺、結果的に高専で起きたことではあるんですけども、そういう国の呼びかけと実際の受け入れ態勢といいますか、それがきちんとされてきていないということにも問題があるわけで、そういったことは大学でも感じるかなんですけども、余り無理をし過ぎない方がいいんじゃないかなと、できることしかできないんじゃないかという気もいたします。

以上です。

【庶務課長】 ありがとうございます。

たくさんいただいたんですけども、幾つかちょっと微妙な点というのがあったことについて回答をお願いしたいと思います。

初めに、理念のところの「特別の事項について」、こ

れは何か。

【校長】 最初の教育理念の2番目のところですね、「教育内容を学術の進展に対応させるため」、これは分かりやすいですね。これは設置基準の方に書いてありまして、そのまま使っております。

次の「特別の事項について」というところなんですけど、これは実は今日お手元の資料4の法人化の最終報告にちょっと関連したことが書いてありまして、3ページに「高等専門学校の現状」というのがありますが、これの一番下の方に、「高等専門学校は、その教育内容を学術や産業の進展に対応させる観点から研究にも精力的に取り組みなさい。」ということになっております。

それからその後、「これまでに高等専門学校の蓄積してきた技術的成果などの普及については、県下の経済情勢もあって地域や産業界からの要請が高まっており、特に中小企業を初めとする生産現場における技術相談、共同研究、インターンシップ推進など、高等専門学校の教育・研究両面にわたる産学連携機能の強化について、高等専門学校においてもきめ細かな教育の推進をしていく。」ということで、教育内容を学術の進展に対応するためには全教官がそういうことで運営しているわけなんですけれども、そのほかのことで、地域や産業界から特に要請があったことを研究する場合、またすぐには教育には結びつくことではないかもしれないけれども、将来結びつくかも分からないというようなことなどの研究も、専攻科の設置がらみでやるべきだと。

そういう意味で、「特別の事項」、その「特別の事項」という言葉も、専攻科の設置の目的のところ、文科省からのそういう文書の中に出ているんです。それをそこに取って付けたようなところでありますが、そういうことであります。

それから、ご質問のカリキュラム改訂は何で2、3年後かというのは、後で森教務主事に説明していただきます。

それから法人化の対応をどう対応しているかということ、後で田中事務部長に説明していただきます。

それから総合学力試験、校長表彰は是非やりたいということで、ご指摘のとおり表彰することにしまして、それぞれ一般科目の1番とか、専門の各学科で1番の学生

には表彰いたします。もう表彰状もできました。

それから「ロボコン支援の会」ですね、これは確かにおっしゃるとおり、国の支援があって然るべきだと我々みんな思っているんですけど、なかなか難しいので、現在「ロボコン支援の会」という、実際ロボコンをつくっている人のご父兄、保護者ですとか、それから学校全体の後援会というのがあるんですけど、その後援会、それから同窓会長もおられますけど、同窓会の方も皆さんが自主的に支援しようということで、ロボコンを作る建物、箱物を寄附していただきました。実際にそのことが今回の全国大会出場に結びついたのでと思います。国の支援については引き続き努力してまいりますけれども、できることは内々でもやろうということで、みんな燃えております。

それから国際交流のサポートに関しては、実は、一昨日ですが、留学生をお世話していただいている県下の、特にホームステイなんかでお世話になっている方で知らない方もいらっしゃるしまして、学生を通じてお呼びして交流会を持ちまして、今後、そういう方の組織をつくって、地元の国際交流委員会なども隼人町、国分市ありますので、そういうところも含めて組織づくりをして、みんなで守っていききたいと。余り無理をせん方がいいとおっしゃったんですけど、鹿児島高専に2年、3年勉強して帰っていったときに、鹿児島は良かった、日本は良かったというような感じを持って帰って欲しいということで努力したいと思っております。

それでは、森先生。

【教務主事】 カリキュラムの改訂については、これは今、高専の方で、各高専で問題になっているところで、もう既に終わっているところが3分の1ぐらいございます。その状況を聞いてみたりして、我々も計画段階にはあるんですけども。

1つこの大きな理由といわれていますのが、中学校の指導要領ですね、これが改訂になっております。そして特に学習内容が3分の1カットというような感じの非常にカットされた段階で入っていきますので、それが今度の1年から入ってくるんですけども、その様子をちょっと見た方がいいと私たちは思っています、その様子を見ながら、学習内容をどう変えていくか、大まかには今度

は全体の時間数ですね、総合学習とか、例えば先進校といたしましうか、大規模に改訂したところは例えば海外研修を入れ込むとか、そういうふうに思い切ったことをされているところもあります。そういうところも研究しながら、今度はちょっと大きな改訂をやらなくてはならないだろうと思っております。そういうことで予定に入っているということで、まだ手はつけなかったということでもあります。

【校長】 中学校と高校とのつなぎをもう少し真剣に考えていかなくちゃいけないなと思います。

【事務部長】 高専の法人化のことについて、私が今、知り得ている情報に基づいてご説明をしたいと思います。

時期は16年4月1日ということで大学と同じでございますが、違うのは通則法に基づいた個別法で、国立高等専門学校機構という機構を各高専に設置する母体として作るというふうになりましたので、そこは通則法の特例法としての各大学の法人法に基づく大学とはちょっと違うということでございます。55高専が1機構のもとに法人本部を設置をして、そこで対応していくということになると思います。

法人本部とはどういうことかといえますと、構成的には、理事長1、監事2、理事6という役員がおりまして、理事長が各校長を任命する。理事長は2年、監事と理事の任期は1年ずつ。そういう役員のもとに、法人本部としておよそ50名強程度の本部ができるということでございまして、これについては新たにどこからか定員が来るということではございませんので、既設の各高専からおおむね1名ずつぐらい拠出を願って、そこで立ち上げるということです。

役割分担的には、各高専、従来の校長のリーダーシップを基にした学校運営あるいは教育研究活動、これについては極力従来どおりの活動を保障したい、新たな制約は設けないようにしたいという趣旨のようでございます。じゃ法人本部というのは何かと申しますと、各高専単独ではできないような事項、全体をひとまとめにやった方が合理的に処理できるような事項、そういうことについて所掌をするという基本的な趣旨のようございまして、具体的にどこまでが法人本部、どこまでが各学

校に任せるとということについては、国専協の中に設けられました4つのワーキンググループがございます。そこで今後検討していくということになります。

それともう一つ、非公務員型だということになりますので、これはもう大学と同じでございますが、全く民間労働者と同じような労働基準法の適用がされるということで、その点については大分対応が違ってくると、就業規則というのをそれぞれの事業所でつくらなければいけない、そして労働安全衛生法の適用のことなどもそういうことになります。新たに就業規則をそれぞれが定めていかなければいけないということです。

それと、人事制度につきましては、かなり弾力的な運用ができるということが掲げられておるのでございますが、高専の場合には中期計画の期間というのが5年ということで定められて、第1期の中期計画の期間、特に着手する16年は、給与その他、現行の実態から大きく違えるようなことはできないということが言われています。ただ、いわゆる非公務員型扱いになりますので、国家公務員法その他の適用はなくなりますので、例えば外国人教員を任用するということは従来は高専の場合ではできなかったんですけれども、これは自由になります。そういうことで教官職員の弾力的な採用、運用ですね、これは将来できるような形になります。財務会計の面でもかなり自由な、弾力的な運用ができるような制度になってまいります。ごく大ざっぱではありますが、以上でございます。

【庶務課長】 ありがとうございます。

【赤坂委員】 1点だけよろしいですか、大分時間がたっていますので1点だけですけど。

ちょっとくどいですが、先ほどの教育理念ですね、大変これは大事な、やっぱり看板みたいなものだと思うんですね。校長先生のご説明でよく趣旨は分かったんですが、専攻科の中にこういう用語が使っているということなんですが、誰が見てもやっぱり分かりやすいものがないんじゃないかなと思っていて、私どもの要望としては、ここのところは鹿児島高専独自の判断、分かりやすい表現をされた方がいいのではないかなとそういうふうに思います。以上です。

【庶務課長】 どうもありがとうございました。

今回のご提言を受けまして、さらに先ほどの研究の位置づけ等につきましても、理念の中にどのように入れるかについて検討していきたいと思っております。

### 深井委員からの意見と応答

【庶務課長】 続きまして、深井先生よろしいでしょうか。

【深井委員】 前回のこの会合の中での提言を細かく分析されて、四十幾つの項目に分けて、この点はどういうふうになったかということをおっしゃられているので、これは大変だなあと。私は有識者じゃないけど、有識者たる者、流れに沿って変なこと言っちゃいけないなと。ますます皆さんは忙しくなる。だから余りいろんなことを言うべきじゃないのかなあと思うようになりました。

2～3ちょっと申し上げますと、今、独立行政法人化というものは直近のもうすぐそこまできている。平成16年4月にスタートするというのが分かっておったんですね。だから、鹿児島高専の教職員の方というのは校長先生以下全部で150人かそこらの方なんだろうけど、どうなるんだろうということが、直接あしたの生活には関係なかったとしても皆さん心配している。特に給料はどうなるんだというふうなことを心配をいらっしゃるから、中期計画、それは多分非常に大事なこともかもしれませんが、もっと直近で、なおかつ非常に重要な独法化に対する、今こういうところまできているんですよと、現実はどうですよというふうなことは、トップの方でその時その時の状況を判断されて周知徹底なさった方が、安心して仕事をなさるだろうと思いますね。

それで、JABEEというのはよく分からないんだけど、あれは大学に対しても、もちろん高専に対しても、だれが考えたのか、ああいうことをやりましようと言っても随分前からやっているわけです。やりましようと言ってやっているんだからJABEEはやってもいいと思うんだけど、とにかく仕事を作っているわけですね、それに振り回されている。だから、JABEEをクリアするということは、それは今の身近な問題として忙しいけどやらなきゃならないんでしょうね。私はJABEEに反対だったんです。それでそういうふうにならぬ、細かい

森と木があって、木の1つ1つは今ここで論議されている問題なんですよ。だけど、森全体は今こうなんだということを常に周知徹底されたらどうかということです。

2~3ちょっと気づいたことを言いますと、高専のPRの方法について、実はこれは私が言い出しっぺで、新聞に広告を出せのなんのと言ったりしたのはそれははっきり私は覚えています。だけど、高専というのは、大学もそうなんだけど、積極的に今何をしているかということを一一般の人に説明する責任があるんですよ。だから、それをやる方法については、それは金がかかるといものもあるかもしれないけど、これは年に1回でもいいから、とにかく高専というのはこういうことをやっているんだ、就職率は100%なんだと、ロボコンはこういう状態だということを皆さんに周知徹底されて、積極的な働きかけというのが必要だと思うんですね。

金は、日経に全国版に全面広告を出しますとあれは何百万ですから、しかし、そんなことを何百万円かかるからやめておきましょうじゃなくて、まさにPRというのは必要だから、しかるべきところに金を要求する、あるいは日経新聞の社長に年に1回ただで出させてくれというぐらいの厚かましさがあってしかるべきですね。広告は積極的にやる。

それから出口試験のこと、これは私も賛成です。出口試験は、やっぱり私が校長のときに、入るときに試験をやって、出るときに試験をやらないというのは大体おかしいと。大学だってそうですよ。入試センター試験というのがあって入るときに試験をしておいて、出る学生がどのくらい品質改善されているか全然分からない。だから、出るところで、入るところは僕はしなくていいと思うんです。出るところでびしゃっと、これだけの試験をやって鹿児島高専を出る。だから、余り難しく考える必要はないと思うんですよ。私はその出口試験が必要だと言っているわけですね。鹿児島高専は、出る段階でこれだけの実力があるんですよと、あるいはこれだけしか実力がないんですよということをずばり全部公開すれば、今、情報公開の時代ですからね、ホームページでも何でもいから、これだけの試験をやったらこういう結果になりましたということを積極的にやる。

JABEEというのは、最低の物差しを持ってきて、これで大学はどうですか、これはどうですかということ

がやられている。これをクリアしたって、まあいわばある1つのスタンダードな物差しはこれだというのがJABEEでしょう。そんなことでごちゃごちゃ言ってたつてだめで、JABEE以上のものが、鹿児島高専の学生はJABEEのスタンダードよりも2段も3段も上なんだと、そういうふうにもって行って欲しい。

鹿児島高専がトップになるには、今、高専は55ある。55あって、それぞれ何とか機構とか名前をつけて、何のためにあるのかどうしても分からないけど、55の高専の中で鹿児島高専がトップになる。トップになるためには、出口試験でうんと難しい問題を出して、それを全部クリアするようにさせたい。ちょっと極端なことを申し上げましたが、以上です。

【庶務課長】 ありがとうございます。

今、4点ほどいろいろ、独法化のことをもっと現実のことについて周知徹底しなさいということとか、PRについてもう少し積極的にしなさいと、それから出口試験についてのレベルのことに関して、JABEE以上のものを作って欲しいということなんですけれども、この点について、校長先生、何かございますか、今4点ほどありました。

【校長】 深井先生にお会いするたびにいつもそういう目で見られておられるのであるだろうと思っておりますが、55高専のナンバーワンになれということで、そんなに感じておりまして、我が高専の教官・事務官には、最近そういう話をよくしているところです。

何をやればナンバーワンになるかということですけども、JABEEに関しては、工業技術者としての教育をちゃんとやっているんだということを、実際卒業した卒業生が社会で活躍しているからそれはもう証明にはなっているんですが、どういう教育をしたからこういう卒業生が生まれるのかと言われたときに、まだそれを証明するような材料を常には持っていなかったというのがありまして、それはやっぱりいつでも情報公開できるようなものを持っておかななくちゃいけないということで、JABEEへの取り組みに対応しております。門先生からJABEEのことを教わりまして、こちらが先におもておることもありまして、規模が小さいこともあって、



学校としてのまとまりといえますか、コンセンサスが得られやすかったことで先にやらせていただいているところですか。

新聞広告をやるべきと言われてました。出口試験の内容を情報公開して、これだけのことができるということを社会に示すべしというようなことをおっしゃいましたが、是非、この方向も目標に向かって努力したいと思います。ありがとうございました。

### 相良委員からの意見と応答

【庶務課長】 続きまして、相良委員の方からよろしくお願いたします。

【相良委員】 今回で3回出させていただいたんですけども、ここの席じゃなくて後ろの向こうの側の方で同窓会長として聞かせていただいたんで、ちょっと戸惑っています。

それで、私は我々が教育を受けたころと現在との中で、卒業後、自分がここまで生きてきた35年間を振り返ってみて、高専で何が足らなかったのかということをつけ加えてもらえたら、学生がより立派になるんじゃないか。

私のころからしたら、やっている講座というのは、学校の勉強というのは非常に幅が広がって、多分今の学生は大変だろうなというふうに思います。非常に幅があって。私どもはアナログでした。だけど、今はもう完全にデジタル化して、普通の一般のアナログ・プラス・デジタルですから、頭の中にいっぱい入らないと相当苦労しているんじゃないかなあと。

その中で、私はやっぱり教養の面で、大学生と2年間の違いで何が違うなあと、ゆとりなのか柔らかさなのか、1期、2期、3期、4期ぐらいまでよく会って話をするんですが、ほかの人から見ると我々はすごく固いと言うんです。くそまじめで固い、頑固だと。これが僕らのよさだと思んですが、やっぱりそれがぶつかるということに近いことがあるんです。ですから、体育とか芸術とかある中で何かもっと人間味が出てくるような教育のあり方が何かあるかなと。

もちろん中には非常にそういう育ち方をして非常に柔らかな人もいますが、たいてい僕らの顔を見たら「お前らは似ているな。」と言うんです。「固いなあ。

しゃべったらもう1足す1は2しか言わないしねえ。」という話なんですけど、そこらが1つですね。

それからもう1つは、いろんな勉強の中に1つも経済がないんです。できましたら、原価管理とか、要するにお金が入って欲しい。もう技術屋だからお金は要らないという時代では絶対ありませんので、そういうものを、たくさんでなくてもいいから、先ほど情報工学の中に機械工学が入っていますよね。わずかでありますけど、やっぱりかじっておくということが非常に大切じゃないかな。それを何か入れていただいたら、より学生の勉学にプラスアルファで社会に出たときに助かるんじゃないかなと、すぐに役立つ。

それから語学ですが、もう英語は当然なんです。英語がないと本当にどこに行っても大変なんですけど、アジアで仕事をするには、英語だけじゃなくてやっぱり中国語が要る。中国語を使えないのは日本と韓国だけで、あとは全部使える、東南アジアだったら。だから、やっぱりある程度の中国語の勉強、北京語ですね、北京語の勉強を入れてもいいんじゃないかな。わずかでいいと思います、かじるだけでも。技術者は必ず行きます、今から中国に。そうしたら、鹿児島高専でやっていたというのがやっぱりかなりプラスになるんじゃないかなと思います。

それから、先ほど赤坂先生からお話しされましたけど、私どもは「ロボコン等支援の会」というか、これはもう昔からあるんですが、もう私どもが学生のころから思っていたことで、こういう工業系の学校でありながら自由に使える工作室がない。工場はあるんですよ、学校が管理する工場はあるんですが、工作室がない。だから、体育館、プール、グラウンド、武道館、そういうものは自由に夜中でも使っても何も文句を言われないのに、工作機械が動いたり溶接をしたりする場所は一切なしと。だから、これで工業系の学校と称するのは私はもう間違いだと思うんです。だから、そこだけは法人化とともに改めていただいて、学生が徹夜でフルに研究に没頭できる、もしくは遊びに没頭できる、ものづくりに没頭できる、何かそういう場所があってもいいんじゃないかなと。ほかの高専の中にはそういう場所がやっぱり出てまいりましたから、それなりに対応している学校があるんだろうなと思います。

是非、そうすることによって、ここの資料2の理念にあるように、「地場起業家の育成」ということがあったり、それから「創造性豊かな開発型技術者」と書いてあるんですが、学校で実際に物をやっぱりつくった人間と、机の上だけで勉強した人間とではまったく違ってくると思うんです。多分この5年間もしくは7年間、この学校で自分が自ら物を切って、溶接したり穴をあけたり組み立てたりしたら、もしくはそれにソフトを入れたりしたら、必ず外に出た瞬間にもう雲泥の差が出てくるんじゃないかなと、もしくは就職してもばかばかしくなって、自分ですぐスピン・オフして独立するというメンバーが増えるんじゃないかなろうかという気持ちです。是非自由に使える場所を提供していただきたいなと、その4つだけです。

【庶務課長】 ありがとうございます。

4点ほど、いわゆる教養の面ですね、知育、体育というんですか、そういうものについて工夫が欲しいということ。それからカリキュラムに経済的なカリキュラムがあると非常にいいということ。それから語学は中国語を少しかじるようなものの工夫が欲しい。それから是非工作室をつくってはどうかというご意見でございますけれども。

このことについて、特に、知育、体育、経済を兼ねての件について。

【教務主事】 経済については、「政治経済」という3年生の授業はあります。経済の基礎的なものはあります。それからあとは5年生ですかね、選択で法律、経済、歴史のどれか1つ選んでということがあります。しかし、今度、専攻科の方には、起業家になるような、そういう「お金の経済」といいますか、そういうのをちゃんとやるようにということが盛り込まれておりまして、そのように以前よりは少しは増えております。

【専攻科長】 「現代企業」とか「株式会社特論」とか、そういうのがカリキュラムではあります。

【相良委員】 私は思っているのは、ずっともっとレベルが低いんですね。要するに、100円のものを作るに

は幾らでつくったら商売になるんだとか、例えば材料を幾らのものを積み重ねていって、人件費がこれぐらいかかって、こういうものができるよというふうな、もう実際的な問題です。それは何も学校の教育とは違うかもしれないから、そういうことも現実を学ばせるということのもあっていいんじゃないかなということだけです。

【教務主事】 相良さん、いつか非常勤講師で来てくださいますか、数時間でいいんですよ。

【相良委員】 そうですね。

これはやっぱり専門家がやる方がいいと思いますよ。ちゃんとあるはずですよ、こういうものはね。

【迫 委員】 口を挟んでなんですけど、ビジネスプランコンテストの学生さんたちののを2回やったんですよ。ビジネスプランの作り方がほとんど分かっていない。ただ思いつきを提案してくることが多いので、今年から、夏休みのころ県下の大学、どこと言わずに、どっか稲盛会館あたりをうちで借りまして、学生のビジネスプランコンテストに応募する意欲のある人は、ビジネスプランとはどういうものかという、今、相良さんがおっしゃったようなこと、目標、基礎的なことになると思うんですけど、それを今年は予定しています。

それで、先生方の皆さんのところの学生さんたちにですね、そういう希望があれば、もちろん授業料無料でやりますので送り込んでいただければと思います。これはもう余計なことですが、実施したいと思っております。

【教務主事】 是非参加して、そういうのを聞いて勉強したいと思っています。

【庶務課長】 ありがとうございます。

## 吉原委員からの意見と応答

【庶務課長】 次に吉原委員からお願いしたいと思います。

【吉原委員】 短時間で、評価、技術、世論、委員会、少しだけ「ABEE」ということをキーワードに話してみたいと思います。

まず、評価ですが、本当にこれだけのものを真剣に取り組んでいただいたということの評価したいと思います。

それで、あと技術ということなんですが、先ほどから話がありまして、まず先に委員会から、委員会ということで、1つ消して1つ作るという、委員会ばかりということの話があったんですが、委員会の最終的な意義というのは、先ほどのように、ここの中でも即戦力と教育というふうに大別して分かれていますね。そういったもののAとBの中から、議論やそういったものというこういう場というのは、CやD、違う新たなものを求めることが最終的目的だと思うんです。だから、それはやっぱり委員会というものの中から、違った何か、違うものの中から新しい何か方向性を見つけていくということをして、そういう意味では確かにある期間、時間を制限してということではいいと思います。

それで、技術ということなんですが、先ほど中国の話がちょっと出ましたが、私は、私みたいな者が、技術に対して余り権威がない、ちょっと知識が浅いのという考えがあまりかもしれないんですが、経済も含めて社会、今、日本の現状を見まして、今やっていることというのはずっと後でないと効果は現れないというか、また結果が出ないというか、いいか悪いかの結果も後から出ると思うんです。今やったことが即効果が出ることもありますが、多くの場合は改革にしても何にしても随分後から効果が出るから怖い、効果というか結果というかですね。だから、そういったことで怖いという面がありまして、改革がいいのか悪いのかというのは、深井先生の話も私は一生懸命この学校のことを思っているんだなと思いました。

その技術に関しての中国の件ですが、今、中国に対抗できる日本の技術、精巧で丁寧ですばらしいものというのは、ここまできたのはやっぱり精巧だ、丁寧だということで、人件費に比べて安いものを取りあえず作るという、とりあえずのニーズじゃないものを日本は持っていると思うんです。そういった部分、とりあえずのものとりあえずでないもの。そういったもので日本らしい技術をしっかりと私は、時間はかかるかもしれないけど、教育の中で植えつけていって欲しいなと私は希望として思いました。

あと1件が、その技術の中に、例えば「世論」という

のを先ほどキーワードの中に出しましたが、土木は今、非常に元気がないんですね。だけど、ドイツや日本のように国土が狭くて資源がないところこそ、先ほど休み時間にちょっと校長先生がおっしゃったけど、今はこういふときだからこそ、みんな思案して、思案して、何かいい方向に向かおうと思って一生懸命考えるんだそうです。ドイツも日本も結局どうして技術がこんなに進んだかといひますと、資源もないし、国土も狭いし、そういったものの中から何とか精巧な技術で加工したいということなどで成功させようということに必死になったことから、日本やドイツは、精巧で、丁寧で、高度な技術ができたと聞いています。やっぱりそういったような時期なんだと思って、どこも頑張ってもらいたいと思います。

あと1点、ちょっとだけJ A B E Eの件で1点だけ。私はよく分からないんですけども、集と個、組織、学校運営としてのJ A B E Eもあると思いますけど、教育の部分で個を育てるということですね。「21世紀は知見の確立だ。」というふうに言われていますけれども、その発想やなんかというのは、やっぱり創造もありますけど、その創造の基となるものは、やっぱり机上でなかなかできないとおっしゃっている両方がかみ合ってできるものだと思います。机上でよく整理して、こういうものは打ち出していこう、こういうものは何かにつなげていこうというものの中から、やっぱり知見が確立できて、そこから発想や創造の能力が生まれてくると思うので、やっぱり順序があると思います。

逆の順序でも構わないんですが、やっぱりそれは机上のものだけと片付けられないで、そこが教育分野のあるべき姿だと思いますので、そこら辺を是非自信を持って、個の教育も頑張ってもらいたい。個人の知見、その人の発想、それが創造につながるとしますので、ただそういうふうに感じました。以上です。

【庶務課長】 ありがとうございます。

大変奥の深いお話を伺いまして、ありがとうございます。個の個性を伸ばすような教育ですか、そういうものについて、それから土木も頑張ってもらいたいということ、いろいろ高い見地からのご指摘、ありがとうございました。

## 最後に（委員から）

【庶務課長】 大体時間になったんですけども、そのほか何かご意見等、最後にあるという方があればお願いします。

【門 委員】 1つだけ、J A B E Eの話がたくさん出たので、ちょっと補足説明をさせていただきたいと思うんですが、深井先生がおっしゃっているJ A B E Eの認識がちょっと違うと思いますので、ちょっと。

J A B E Eというのは、簡単に言うと品質保証なんです。ISOがヨーロッパの戦略ならば、J A B E Eはアメリカの戦略であるという捉え方もあるんですが、やはり品質保証、いわゆる教育の品質保証をして欲しい。上は無限にある。ただここより下はだめですよというレベル保証はしてくださいと。それをするためのシステム作りは必要だ。システム作りというのは、要するに教育目標を設定して、それに教育の教員団はどういうふうにかかわって創造的に取り組むか、学生はそれを一生懸命目標に向かって、学習目標を達成するためにどういうふうに努力させるか。その成果がどういうふう上がったかということをチェックしなさい。それで、その結果によって改善をしなさいというシステムづくりですので、ですから、これはうまく運用するとものごくよくいくと、悪くすると全然だめになる。だから、組織によってものすごくユニークな運営の仕方ができると思いますので、これは是非ユニークな取り組みをしていただきたい。

基本は、教員団が活性化するということが一番重要です。そこを、教員団が腐らないようなシステム作りをするということが非常に重要であると思います。

1つ気になっているのは、教育のレベル保証のところ、補習をするとかということなんですが、大学は2006年問題と言っていますけど、高専さんは2003年問題ということになっているんですが、その辺は少し様子を見ようということですけども。

もう1つ、レベル保証だけの問題じゃなくて、優秀な学生をさらに伸ばすということ、鹿児島大学で今、共通教育で非常に議論をしてきているんですが、要するに、習熟度の多様性に対応して、伸びる能力のある人はもっと伸ばしてあげる。能力がちょっと落ちている人については、やはりここまでは上げようという、底上げという

ことだけに意識を持っていくんじゃなくて、伸びる人はもっと伸ばしてあげようというのも、やはり今後、教育の中でしっかりしていかないと、それこそ55校のトップになるというふうなことを考えた場合、上を伸ばすということは是非考えていかれる必要があるかと思っております。

【赤坂委員】 もう1点、今の件ですが。J A B E Eというのは、個人、技術者個人の資格ですね、それとの関係が大変あるわけですね。それも国際資格といったものとの、これから技術者が国際的に流通するとかそういったことがあって、そういう資格取得と大変関係があるということですかね。そういったシステムは大変大切だと思います。

【庶務課長】 ありがとうございます。

深井先生はやはりJ A B E E反対だとおっしゃっていますけれども。

【深井委員】 いや反対というかですね。J A B E Eというのは、Jはジャパンなんだけれども、みんなアメリカの引き写し、それからT L Oは関係ないけど、T L Oも外国のものをそのまま持ってきている。そういう何と何と泥縄式で組織が最初に先行するわけです。それに人間が一生懸命追いついて、泥縄をつくって泥棒を捕まえようとしている。そういう趣旨、姿勢が僕は嫌いで、だから、T L OとかJ A B E Eとかというふうアルファベットのものというのうさんくさい気がするんですね。

【庶務課長】 その辺は重々心して取り組んでいかなきゃならないと思っています。

## 閉会のあいさつ（校長）

【庶務課長】 最後に、校長先生から閉会のあいさつをいただければと思います。

【校長】 どうも今日はありがとうございました。

前回、2年前にご指摘いただいた点、それぞれについて頑張ったつもりでありますけれども、全くできなかった

たこともありましたが、対応したことについても足りない点、まだ少し不十分な点、そういうことを指摘していただきました。

法人化に向けて、またJ A B E Eに向けて、すべてがこの2つの部分に結びつくことなのであります。2年前に指摘していただいたおかげで、現在やっとここまでできたということでございまして、今日のご指摘で、さらにもう少し抜けたところもしっかり埋めて、アルファベットに対するところの本当に嫌なところも確かにあります。ありますが、それを避けて通れないところもありますので、そのいいところをきちっと認識して、しっかり地に足の着いた、特色のある鹿児島高専という教育機関を作りたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

【庶務課長】 どうもありがとうございました。

閉 会

有識者からの提言に対する本校の今後の対応等

	有識者からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
1	教育理念 教育理念の2番目の文中の「また特別の事項について」という意味が分かりにくい。	地域や産業界からの要請があった場合の研究やすぐには教育に結びつかないが将来に可能性のある研究等を「特別の事項」として捉えている。	教育理念において、より具体的に明記するよう、検討していく。
2	委員会等 理念・目標等を達成するための委員会の機能が見えない。		教務委員会及び専攻科委員会の連携を図り、教育プログラムを点検・改善し、理念・目標等を達成するための組織の設置を検討する。
3	教育目標 シラバスには、本科の教育目標との関連は記載されているが、学科の教育目標との関連が記載されていない。	シラバス記載の学習・教育目標とその科目内容との関係から、教員は全体の学習・教育目標のどこを担っているということは認識がある。	学科の教育目標とその科目群の関係を示す必要がある。
4	教育目標 目標を担うためのカリキュラム作りの取り組みが見えない。また、その効果を調査し、評価を行い改善するといった部分が見えない。	定期試験後、教務主事・クラス担任・科目担当教官が中心なり、成績会議を開催し、教育効果について検討している。また、教務委員会や一般科目の英語・数学の会議でも検討している。	教育点検システムは、学校全体で検討すべきものであるが、そのテーマによって検討する委員会が異なってくるため、テーマごとに連携組織の構成を示す必要がある。
5	教育方法 創造性豊かな学生を育てるために、個人を育てる教育も行っていたきたい。	創造教育に関する授業を行っている。	自ら解決する学習(PBL)をそれぞれの学科がシラバスに掲載の上、設定する予定。
6	カリキュラム改訂 「2,3年以内に抜本的なカリキュラムの改訂が必須となる。」とあるが、何故、「2,3年内」なのか分からない。	中学校の指導要領が改訂になって初めての学生が、平成15年度に入学してくるため、その状況を調査しながら、本校のカリキュラム改訂に望む。	新入生の学力を調査の上、抜本的なカリキュラム改訂を行う。
7	授業科目 技術系であっても、経済に関する授業をとりいれて欲しい。	本科では「政治経済」、専攻科では、「現代企業」、「株式会社特論」がある。	経済に関する授業を今後も継続したい。
8	授業科目 中国語の科目を取り入れて欲しい。		前向きに取り組んで行きたい。 (検討したい)
9	総合学力試験の表彰制度 総合学力試験で、成績優秀者は校長が表彰するとか。そのような制度を設けてはどうか。	総合学力試験の一般科目、各学科の1番の学生は表彰することになっており、既に表彰状もできている。	総合学力試験の表彰 総合得点 各学科第1位 共通科目 全学科第1位 TOEIC 第1位
10	出口試験 出口試験の結果を公開し、鹿児島高専卒業生の実力を社会に公表しなさい。	平成13年度から総合学力試験として実施。	平成13年度から「高専だより」で公開している。
11	オフィス・アワーズ オフィス・アワーズが、シラバスに明示されていないため、学生への周知方法が分からない。また、その効果が上がっているのか分からない。	平成12年1月よりオフィス・アワーズを導入し、教官室の全てにオフィス・アワーズの掲示版がある。また、本科はクラス担任制があり、担任を通じて様々な連絡を行っている。	入学時のオリエンテーション、学生便覧への記載等、学生へのPR方法について検討する。

		有識者からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
12	オフィス・アワーズ	オフィス・アワーズの時間に学生が行っても教官がいけないという割合が高いようであるが、その趣旨を徹底していく必要があるのではないか。	学生はオフィス・アワーズの時間に関係なく、部屋を訪問するが、平成12年度1・3学年を対象としたアンケート調査で、在席割合が1年65.3%、3年47.2%と低いことから、その割合を高めに行く必要がある。	入学時のオリエンテーション、学生便覧への記載等、学生へのPR方法について検討する。
13	J A B E E	鹿児島高専の学生はJ A B E Eのスタンダードよりも2段も3段も上になるような教育を行ってほしい。	卒業生が社会で活躍していることが証明ではあるが、どういう教育が良かったかを証明できるものがないため、J A B E Eの取り組みを行っている。	平成16年度のJ A B E E認定を受け、継続していくことにより、技術者教育が向上していく。
14	J A B E E	時間はかかるが、しっかりとした技術を教育して欲しい。		平成16年度のJ A B E E認定を受け、継続していくことにより、技術者教育が向上して行く。
15	J A B E E	教員団が活性化するようなシステム作りが重要である。 なお、教育システム作りには、ユニークな取り組みをしていただきたい。	学生の教育等に功労したものに對し、平成13年度から表彰を実施している。	教育等の功労者は、学外の賞にも応募していく予定である。
16	J A B E E	技術者教育では、優秀な学生をさらに伸ばすということも勘案し、教育を行っていただきたい。	ロボコン、プログラムコンテスト等の大会に傾注し、本校学生の技術力をさらに伸ばしている。	学生の技術力を発揮できる各種大会において、学校のバックアップ体制を整えたい。
17	留学生支援	留学生を支援する体制を整えることは難しい。	留学生を支援している地域の方、隼人町・国分市の国際交流委員会の方と交流会を実施している。	地域の方や地元の国際交流委員会等を含めた方々による、留学生をサポートするための会を発足したい。
18	ロボコン支援	経費の面などでロボコン等支援の会があると思うが、国の支援を獲得するなど、模索してはどうか。	国の支援があって良いと思うが、難しいので、「ロボコン支援の会」から、物資の両面から支援いただいている。 国の支援については引き続き努力するが、できることは内々でも行っていく。	国の支援について、引き続き要請を行うとともに、ロボコン支援の会にも協力いただき、活動を活発化していく。
19	研究の位置づけ	高専の研究はコンセンサスがまだないとのことであるが、高専としての位置づけが必要ではないか。	高専設置基準により、高専の研究の明確な位置づけはなされていない。しかしながら、5年生の卒業研究、専攻科生の特別研究等で研究の重要性は認識されているものと考えられる。また、地域共同テクノセンターおよび錦江湾テクノパーククラブが設置され、共同研究の推進に利用されている。	教育理念において、より具体的に明記するよう、検討していく。また、研究の重要性を認識し研究促進のため、卒業研究、特別研究等をベースに、学会発表、論文投稿や特許取得を進めていく。さらに、地域共同テクノセンターあるいは錦江湾テクノパーククラブを活用して、共同研究の更なる推進を図っていく。
20	高専PR	高専のPRは、高専の状況を社会へ知らせるといふ説明責任もあることから、積極的に取り組むべきである。	広報誌やホームページによるPRを行っている。	マスメディアを利用した鹿児島高専のPRを検討する。

		有識者からの評価及び提言	提言に対する現状分析	提言に対する今後の対応又は意見
21	ワシントン枝払い	ワシントン椰子の枝払い機は、とにかく急いで、本当にビジネスにして欲しい。	電子制御工学科の卒業研究のテーマとしても取り組み、平成14年度までに、木登り機構を完成させる等研究開発を進めている。細部の仕様について、一部検討課題も残っているが、技術室も協力しており、製品化を急いでいる。	枝払い機の仕様を確定の上、試作機を完成し、特許等を申請する必要がある。そのため、地元企業との共同開発の推進を検討していく。また、開発費として、かごしま産業支援センターの研究助成金や学内研究助成金などを活用し、開発のスピードアップを図っていく。さらに、ビジネスにした場合の企業化をどのようにするか、今後検討していく。
22	独立行政法人化	独立行政法人化に伴い、その状況を全教職員に周知徹底する必要がある。	情報が確定した時点で、教職員には周知している。	独立行政法人化に伴った変更点など、確定した内容は、全教職員を対象とした説明会を開催する。